

中国文化大革命とモンゴル人エリートの変遷：  
作家ウランバガナを事例に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: チョロモン メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00010098">https://doi.org/10.14945/00010098</a>

# 中国文化大革命とモンゴル人エリートの動向

—作家ウランバガナを事例に—

## チヨロモン

### はじめに

本稿は、現代中国の国民統合のプロセスを内モンゴルのエリート層の政治動向を事例に考察したものである。具体的には文化大革命を前後にした国民統合がどのようなプロセスで行われ、そこにどのような問題が内在化していたかを探ることで、中国の性質を分析するだけでなく、世界が「強国」と見なす同国の動向を予測上でも大きな意義があると考えられる。従来少なかった民族エリートの動向研究というアプローチ方法は、民族地域における国民統合、即ち現代中国の民族政策の問題点や今後の民族問題を議論する上でも軽視できない課題である。

周知の通り、内モンゴルは清朝崩壊から現在に至るまで、時の支配権力に従属させられ、民族的な被抑圧の状態が続いてきた。内モンゴルは20世紀前半においては漢民族のみならず、列強（ソ聯や日本）の進出もあり、後半は中華人民共和国の政治変動に翻弄される悲劇的な道のりを辿ってきた。そうした複雑な歴史において、中華人民共和国（以下中国）によって統合される20世紀後半の内モンゴルに注目したのは、本研究の重要なところである。

かかる時期の内モンゴル地域を国民国家の枠組に包摂して行く中、中国共産党に最も重視された手段は、モンゴル人エリート層の再教育問題であった。

戦前のモンゴル人エリート層は、「満洲国」、「蒙疆政権」、国民政府といった三つの違う政権下に分断されていて、思想系譜から国家・民族に対する認識まで相違点が多かった。「満洲国」や「蒙疆政権」出身のエリートは、日本式の近代教育を受け、なかでは日本留学歴を持つ者も多く、モンゴル民族の独立を主張するのが彼らの活動の根本的な特徴であった。一方、国民政府領内におけるモンゴル人エリートの状況は、より複雑で多種多様だった。国民党側に「北傾派」ナショナリストと呼ばれた共産党、外モンゴルやソ聯寄りのエリートがいれば、「内向派」ナショナリストと呼ばれた国民党员ないし国民党寄りのエリートもいた。だが、1945年の終戦を契機に、モンゴル人エリート層に大きな変動が起こり、国民党に近いモンゴル人エリートの多くは、蒋介石とともに台湾へ逃れ所謂「在外モンゴル人」エリート層を構築した。「蒙疆政権」のエリートの中、徳王の側近だった少数の人が台湾経由でアメリカに亡命し、内モンゴル独立運動の支援を求めた書簡を合衆国聯邦議会に提出するなどの活動を行ったほか、多くのエリートが内モンゴルに残り、共産党の再教育の

対象となる。人数的に「満洲国」のモンゴル人エリートはもっとも多く、ほぼ全員がモンゴル人「残留組」エリートとして共産党の人民共和国に残り、彼らは東西内モンゴル合併後の再教育、再編の道を余儀なくされた。上記の旧政権のエリートに加え、戦後頭角を現したのは延安派のモンゴル人エリートであり、その存在も軽視できない。

内モンゴル自治区は、共産党の民族政策の特徴となる「区域自治区」の最初のモデルとされ、共産党の民族政策全体を考える上で非常に重要な意味を持ち、すでに中国民族政策の観点でアプローチされてきた。だが、従来の研究では、民族「優待」や「平等」という文脈で共産党の民族政策及び国民統合を正当化する研究が多く、民族地域の統合過程において共産党に最も重視された民族エリートの再教育問題が見逃されてきた。もちろん、ウランフーなど党や政府の要人政治家に関する研究もなされているが、アプローチの視点がほぼ前者と同様である。言い換えれば、ウランフー研究はモンゴル人エリートの側面からではなく、統合する側の代物として論じられている。実際、内モンゴル自治区は中華人民共和国の成立に先立って誕生しており、当初共産党の一方的な統合にすべてのモンゴル人エリートが賛同したわけではなく、抵抗を示した民族主義者も数多く存在していた。一方、共産党の統合に関与したエリートのなかにも、共産主義者や非党員知識人といった様々な人たちがいた。例えば、本論文で取り上げるウランバガナのような政権によって「育てられた」作家や、新中国の憲法、民族自治法制定工作にも参加したモーノハイ（茂傲海）のような幹部らが挙げられる。だが、彼らは未だに研究者に注目されていない。上述したように従来幾つかの異なる政権に分断統治されていたモンゴル人エリートが、新しい政権のもとでイデオロギー的に再教育される過程において、どのような行動を見せたかを包括的に考察しないと、中国共産党の民族統合の本質が明確に見えないであろう。

こうした問題意識を踏まえながら、本研究ではウランバガナという一人の人物の軌跡を追いながら中国における周縁民族の統合戦略に接近してみたい。ウランバガナは、戦後中国共産党の政策によって革命的作家として育てられたモンゴル人エリートの一員である。彼は、現代内モンゴルを代表するベテラン革命的作家であり、特に文化大革命以前の「17年間」において、その文学作品が十数カ国の言語に翻訳されるほど有名だった。文化大革命の際、当時の権力側に最も近い存在として内モンゴル自治区革命委員会の指示のもとで活躍し、一時人気を博したが、文革後には内モンゴルにおける文化大革命の責任が追求され裁判にかけられて失脚する。このように中国の政治運動に翻弄され波乱万丈な人生を送ったウランバガナは、まさに共産党の周縁民族に対する統合戦略を検討するに適した人物であり、被統合側の視点から問題提起するにも良い例である。彼の活動は、文革の「前史」と「後史」を含

めて、内モンゴルにおける中国の統合政策の一貫性を説明できるものと考えられる。

内モンゴルにおけるウランバガナに対する公式的な認識として、「少数民族の作家で、文革期の内モンゴルに起こった「内人党事件」をでっち上げた立役者、犯罪人」であるというのが一般的である。このような記号化された認識によって、彼は研究者に長年無視されてきた。

ウランバガナの経歴を振り返ってみれば、現代内モンゴルの文学史から政治史に至るまでに彼の果たした役割が非常に大きく、彼の行動を無視して現代内モンゴルを語る事が不可能である事実が分かる。彼は、終戦の1945年に元満洲国興安軍官学校から中国共産党の革命に参加する。1948年以降は内モンゴルにおける共産党の初の機関紙となる『内蒙古日報』の新聞記者のほか、内モンゴル党委員会宣伝部職員、内モンゴル青年团团長、第三回全国人民代表、全国人民代表民族委員会委員など党や政府の様々な重要なポストについた。さらに、文芸界においては、彼は一世を風靡した有名な作家とされたのみならず、内モンゴル文化芸術界聯盟主席、内モンゴル作家協会主席などを務め、現代内モンゴル文芸界を引っ張ってきたリーダーでもあった。文革期において、内モンゴル自治区のウランフー・ハフングをはじめ最高指導者が皆打倒され、内モンゴルが指導者「不在」の激動の時代を迎えた。その時、ウランバガナは、内モンゴル革命委員会主任の滕海清、呉涛、高錦明ら文革実力者の側近となり、「内蒙古揪叛国集团聯絡站」のセンター長を務め、事実上の「指導者」の役目を演じたといっても過言ではない。しかし、文革期における「内人党事件」の迫害の深刻さや文革の後処理が不十分であったことにより、ウランバガナは内モンゴルの文革の責任を一人で負われる人物となり、否定される人間とされ、次第に暗黙上のタブー領域に入れられたように思われる。

ウランバガナの文学を専門的に扱った研究はいまだに現れていない。文革以後、内モンゴル現代文学史の中でも彼に触れた内容が僅かな紙面を占める程度であった。

近年、文革研究の進展に伴い内モンゴルの文革に関連する資料も少しずつ知られるようになってきている。なかでも楊海英氏の公刊した『基礎資料』シリーズが、ウランバガナの文化大革命中の政治活動を把握するには、一定の裏付けの証拠を提供している。とは言え、ウランバガナを事例に内モンゴル現代史を再構築するには、更に多くの史実を追求する必要があると考えられる。なぜならば、彼の文革期の行動やその後の逮捕・裁判・投獄・服役・釈放・そして晩年生活について依然として多くの謎に包まれているからである。

本稿は、ウランバガナの文学活動のほか、政治・社会活動にも射程を広げ、彼を通して中国におけるモンゴル人エリート層の政治動向を検討する。具体的に、ウランバガナの活動を文革以前、文革期、文革以後という三つの時期に分けて、各時期における政治的背景にも注視して分析を行いたい。

冒頭の問題意識の中でも述べたが、中国少数民族に対する人々の思考が国民国家単位の枠内にとどまる傾向が強いために、近代国家から外れてた諸民族の近現代史は、「忘れられた」過去の存在となっている。しかし、東アジアの多様性を理解し、近代国家の複雑さを認識をする意味で、民族エリート層の研究は、示唆に富むテーマであろう。

## I. 文革以前

### 1. 内モンゴルの政治地位の変化

清朝支配下に入ったモンゴルは最初の一世紀間は大きな混乱に直面することもなく、政治的に安定した時期を送った。ところが、清朝は内憂外患の状況から脱するため、「封禁政策」をやめ、漢人移民を19世紀後半から増加したことにより、モンゴル民族社会にかつてないほど衝撃をもたらした。こうした歴史的条件のもとで、20世紀中頃までには、北部における一部の草原地帯と大興安嶺の山間部を除き、内モンゴル地域の生産形式は遊牧から半農半牧或いは定着農耕に変わっていった。それにより、従来のモンゴル社会と伝統文化と異なる新たな特殊性をもつ地域が形成されてきた。

そうしたなかで、東西内モンゴル各地において漢民族とのエスニック・コンフリクトが頻発しており、特に牧場の開墾と農地化に対して、牧民による抵抗と反発が繰り返された。こうした抵抗運動は、清朝の崩壊に伴うモンゴルの民族主義運動へとつながった。19世紀末になると、日本が内モンゴル東部、帝政ロシアが外モンゴル及び内モンゴル西部に勢力を伸ばし、内モンゴルを取り巻く地政学的な状況がより複雑になった。

内モンゴルの地域社会が遊牧社会から農耕社会へと大きく転換した結果、それまで土地の権利を有していたモンゴルの王公、旗人、寺廟などと入植してきた漢人との間には複雑な重層的な権利関係が展開していった。中華民国期には、こうした漢族農民による土地の開墾がさらに進み、モンゴルの王公・旗人、漢族農民との間の土地をめぐる権利関係は一層錯綜したものとなっていった。1932年以後、内モンゴル東部地域は「満洲国」の統治下に組み込まれていく。内モンゴル中部は徳王が指導する「蒙疆政権」に統治され、西部は国民党の統合下で、分断状態が続いたが、1947年以降は、中国共産党の指導のもとで内モンゴル自治政府が成立した。やがて、内モンゴルは中国共産党の指導下で政治的に統一され、漢人地域を含めた「地域」としての内モンゴルが形成された。これはモンゴルや中国の周辺社会として位置づけられているほかの少数民族地域の歴史における重要な変化を示すものであった。

## 2. 政治と内モンゴル作家群の再編制

内モンゴル自治政府が成立したと言っても、内モンゴル全体の統一、或は統合が完了したわけではなかった。綏遠省などは国民党の支配下に置かれていたし、旧「蒙疆政権」の民族主義者らの独立運動も完全に収まっていなかった。さらに言えば、すでに成立された自治政府の内部においても、様々な政治的な立場を持つ人々が存在し、不安定な状況がずっと続いた。

こうした背景もあって、共産党側はエリート層の再編をとおして統合の正当化を宣伝した。エリートの再編手段は大きく分けて二つあった。一つは、革命と暴力の方法で、もう一つは説得と教育の方法だった<sup>1)</sup>。前者は肉体を消滅する方法で、後者は洗脳説教の方法、即ち「思想を消滅」する方法である。その結果、異なる思想体系を持つエリートが完全に共産党の体制下に統一されたのは、新体制による統合の正当性を宣伝に盛り込んだからである。宣伝の過程にも奨励と賞罰の方法が伴い、統合の正当性を肯定すれば奨励され、否定すれば処罰を受ける。

以下、主に内モンゴルの作家群に絞ってこの問題を言及したい。文芸界における再編は、文芸工作会議の開催、全国レベルの作家協会や自治区レベルの作家協会の組織、文学研究教室などによって進められた。

### 2.1 内モンゴル文芸工作者聯盟と中国作家協会内モンゴル分会の発足

現代中国の文芸工作は、1949年7月2日から19日までに北京で開かれた「第一次全国文芸工作者代表大会」からはじまった。大会の趣旨は、毛沢東の文芸思想を貫徹させ、文学芸術が人民大衆や工農兵に奉仕することを、今後の全国文芸活動の方針とすることだった。この会議から中国の新民主主義文芸は終わり、社会主義文芸活動が始まった。

同会議の精神を内モンゴルに宣伝するため、1949年11月に、内モンゴルのウランホト（烏蘭浩特）で、内モンゴル文芸工作者代表大会が開催された。ここで、内モンゴルの文化芸術家聯盟準備委員会を組織し、文芸工作者大会第一次会議規定が採択された。これにより、「革命の内容、民族の形式」を特徴とする内モンゴル文学の構築が決められた。モンゴル語文芸雑誌「内蒙古文芸」の発行も決まった。

1953年9月、全国文芸工作者第二次代表大会が開かれた。過度期の総方針に文芸が如何に奉仕すべかについて協議した。その結果、「文芸の任務は、文芸の機能を持って社会主義改造を促進し、社会主義思想で人民を教育することだ」と示された。同大会の精神に基づいて、11月に綏遠省で、自由文芸工作者会議を召集し、アマチュア作家の積極的な文学創作を支持するとし、更に人民の間の口承文芸を集める

---

<sup>1)</sup> 満全「經典伝統与評価体系—有関納・賽音朝克図の經典化問題」

ことも決定された。

1954年3月の内モンゴルの作家創作会議が開催され、作家の思想改造問題が協議され、作家同士の文学創作の経験交流が行われた。同年10月に、内モンゴル第一次文芸工作者代表大会をフフホトで開催した。全国文芸工作者第二次代表大会の精神が伝えられ、内モンゴル文芸工作者聯盟（以下「文聯」と省略する）が設立された。

内モンゴル文聯の設立は、内モンゴルの文芸工作における党の指導を強化し、文芸工作者たちの団結を強化し、社会主義文芸の発展の基礎を築くことを目標とした。これは、内モンゴルの作家が党の組織に属することで、体制内に含まれたことを意味する。換言すれば、創作は党のイデオロギーに従うことである。モンゴル人作家の独立した創作思想が喪失した。

1955年1月20日、文聯のメンバーである作家のマルチンフ<sup>2)</sup>が中国作家協会に向かってモンゴル人作家を中国作家協会の統一した政策の下で一律平等に重視して扱うよう訴えかけた。彼は次のような手紙を書いた。「私は作家協会の工作は会員を通して実現されると思っている、中国作家協会に少数民族の作家がいるかわからない、内モンゴルの作家の中でまだ全国作家協会会員になった人はいない。漢族の文学に比べて、内モンゴルの文学の発展は甚だ遅い。なぜならば、内モンゴルは少数民族地域だからであろう。こんなに遅れている地域の文学や作家たちに、中国作家協会はどのような対策や援助をしてきたのか。内モンゴル作家群の本当の状況を把握しているのか。なぜ著名な詩人ナ・サインチョクト<sup>3)</sup>を全国作家協会会員に採用しないのか、理解できない。彼の詩を内モンゴルの牧民だけでなく、モンゴル国の人民まで皆知っている。彼は1947年にモンゴル人民共和国への留学から帰国した。彼は内モンゴルで最も有名な作家なのに、いまだに中国作家協会会員になっていない理由を示されたい」。という内容だった。3月12日に、中国作家協会から返事の手紙は来た。「1月20日に送ってくれたあなたの手紙の内容を我々は、作家協会の第9回常任理事会で取り上げて議論した。あなたの指摘は正しいと我々は思っている。建国以来の我国の少数民族文学は大いに発展してきた。各兄弟民族の中から沢山の文芸工作者の新人が現れ、あなたのような優秀な青年もいる。確かにいままで中国作家協会は兄弟民族の文学の発展においてあまり力を入れてこなかった。この点は重く受け止めて、反省している。今後、この状況を改善するために作家協会として以下のような対策を考えている。①各少数民族地域の文学の状況を理解するための座談会を今年4月に開き、座談会を通して、意見交換し存在する問題点をまとめたい。そ

---

<sup>2)</sup> マルチンフ（1930～）「17年間」を代表する漢語創作のモンゴル人作家、代表作に『ホルチン草原の人々』『茫々たる草原』などがある。

<sup>3)</sup> ナ・サインチョクト（サイチンガ1914～1973）日本、モンゴル人民共和国留学経験のある近代作家から、建国後内モンゴルの現代文学界を率いてきた著名な詩人。

それを5月に開催される中国作家協会第二次理事会で議案として提議し、今後各民族の文学工作をどのように行うかを報告にまとめたい。②座談会を通して、我々は各民族の作家たちの状況を把握し、一部の少数民族の作家を段階的に中国作家協会の会員として受け入れたい。③各民族の作家たちはそれぞれの民族の文学作品を紹介し、それらの文学の漢語訳、出版掲載の問題についても協議したい。座談会や第二次理事会を通して、我々は各民族自治区文芸界と常時連絡する方法を決めたい。それからナ・サインチョクトの履歴や文学作品を詳しく紹介してもらいたい」という内容だった。そして4月の座談会議にマルチンフやナ・サインチョクトは内モンゴルの代表として参加した<sup>4)</sup>。

中国作家協会第二次理事会会議（1953年9月）から約2年経った後の1956年3月に、ナ・サインチョクトは中国作家協会第二次理事会（拡大）会議において、中国作家協会第一次理事会の理事に補選された。拡大会議でナ・サインチョクトは、創作言語に関して「内モンゴルで母語と漢語に精通した一部の若手作家は、全国的な知名度が上がらないと考えて、民族言語による文学創作を諦めている。このような歪んだ思想に支配されて、自民族の言語ではなく、ひたすら漢語創作を続けている。マルチンフやウランバガナ、ジャラガーフ<sup>5)</sup> たちも皆そうである。このような文学現象は内モンゴル自治区において評価できない異常な現象であると考えている。改善してもらいたい」<sup>6)</sup> という内容の報告をした。内モンゴルに戻った後も同じ内容の報告を内モンゴルの作家たちに向けて行った。

1956年12月に、内モンゴル文学工作者会議が召集され、アマチュア作家の文学創作活動を支持し、民族言語による文学創作や青年作家を育成することが強調された。今回の会議を通して、中国作家協会内モンゴル分会を設立し、ナ・サインチョクトは主席、マルチンフとア・オソル<sup>7)</sup> が副主席に選ばれた。

文聯に続いて、中国作家協会内モンゴル分会も発足されたが、これらの組織は、純粋な文芸団体ではなく、党の指導下の宣伝組織である。そこに介入することは、党の組織に入ったことであり、モンゴル人作家もただの文学者ではなく、文芸界の党所属の幹部という二重の身分を持つように変化していく。

---

4) S/Oljibatu Sarancimeg 2004 p236

5) ジャラガーフ（1930～2008）内モンゴルを代表する漢語創作作家、代表作は『紅路』

6) S/Oljibatu Sarancimeg 2004 p241～242

7) ア・オソル（1924～2010）内モンゴルを代表する作家、代表作は『アルマスの歌』



## 2.2 文芸工作会議と文学創作

1949年から1976年までの中国文学を通常「17年の文学」と呼ぶ。この初期の文学の特徴について、ある研究者が「会議に指導された文学」<sup>8)</sup>と定義した。その定義の通り、17年間で会議と文学は一体化していた。1949年11月に開催された内モンゴル文芸工作者代表大会によって内モンゴルの文学が中国文学の一部として、社会主義文芸の道を歩み始めた。そして、内モンゴル文芸工作者聯盟と中国作家協会内蒙古分会も発足され、一見すれば、内モンゴルの文学が自らの代表大会を持ち、本学的な文学の道を歩んだように見える。しかし、実際の所謂文芸工作会議は、形式上は文芸会議になっても、その内実は政治会議の性質を持っていて、政治任務を完成させることがその目標であった。

現代内モンゴル文学研究において定説となっているように、初期の17年間で、作家の個性が抹殺され、全ての作家が思想的に統一されていた。だが、こうした「現象」は偶然ではなく、繰り返し開催された「文芸会議」によって形成されたのである。その代表的な例は、1957年の反右派運動の時に58回にわたって開催された会議である。

1957年になって、内モンゴル自治区においても反右派闘争が激しくなり、文芸界も10月7日から計58回に亘って集中会議を開き、文芸界における右派分子に対し批判闘争を行った。最終的には、内モンゴル文芸界共産党指導部（党组）の主催で、1958年3月23日から4月1日にかけて、文芸界における反右派闘争の総括を行った。この時期から内モンゴルにおいて、文学芸術は必ず当面の政治に奉仕することや、文学芸術家と党の関係に関する問題について広く議論することとなった。

このような会議は内モンゴル文芸界の方向性を決めていただけでなく、少数民族の作家を教育する重要な手段にもなった。重要な会議が開催されるたびに、その会議の精神を繰り返し学習しなければいけない。洗脳教育の典型である。

会議によって作家たちの自由な文学思想はコントロールされた。さらに、文芸創作にも直接影響を与えた。当時の内モンゴル文学作品の中で会議を主題とした作品が非常に多い。ウランバガナの短編小説も、ほとんど会議や政治の出来事を報告文学の形で発表されている。

会議は文学創作のもとであり、会議の精神を作品の中に反映し宣伝することは作家の思想を図る基準となり、作家は会議を宣伝する役目、所謂「党のウグイス」の役割を果たさなければならなかった。作品の中で何を書くかを、作家に決める権利がなく、党が決めたものを書かなければいけない。旨く書かない場合、漢人の作家の指導を受けながら「共同」で創作を行う。そうして、生まれた作品を今度は、著名

---

<sup>8)</sup> ナミヤ：『17年間』におけるモンゴル文学の会議（蒙文）、『内蒙古大学学报』2009年第6期 p83

人や政治家の「評論評価」によって名作に作り上げる。これについては後に、ウランバガナの代表作『草原烽火』の創作経緯を事例に詳しく言及する。

### 2.3 中国作家協会第二次理事会拡大会議と内モンゴル文学

中国作家協会第二次理事会拡大会議（以下「拡大会議」とする）は、1956年3月に開催された。そこで「中国作家協会1956年到1967年的工作綱要」（中国作家協会1956年から1967年までの工作方針）が決議（3月6日）された。綱要では「全国の社会主義建設と社会主義改造が高まる時期に、作家協会は、現在の第3次五か年計画の時期に合わせて、より長期的な文学発展計画を定め、そこからの12年間で、我が国の作家陣営を何倍も拡大し、我が国の人民の要求や時代の精神に合わせた文学作品を大量に輩出し、社会主義精神を以て人民を教育するために奉仕する」ことが強調された。

具体的には、「文学創作や文学発展についての第1～第6項目」、「文学理論研究や文学批評工作を発展させる第7～第12項目」、「青年作家を育成する工作についての第13～第22項目」、「各兄弟民族文学発展について第23～第28項目」、「国際文学交流事業についての第29～第35項目」、「編集・出版工作についての第36～第40項目」、「作家協会の事業を強化することについての第41～第44項目」など計44項目の具体的な計画が定められた。

ここで、兄弟民族文学や青年作家に関する項目はいくつか示されたなか、青年団を通して全国の文学愛好者間の交流や学習を推進し、各地の作家分会は新聞雑誌を通して宣伝を行い、各地の状況に適応した作家の個別指導や文学創作を指導する活動を展開する。各地の作家協会や新聞雑誌社は、有能のある通信員を重点的に作家として育てることが決定され、1958年までに各地方の作家協会は、青年作家工作委員会を設立し、定期的な講演会、座談会、報告会を開き、原稿の査読やチェック機能を活用して、青年作家たちに対する指導を行うとした。1956年から1958年まで、中国作家協会は青年作家を育成するための短期創作指導班を計6回に分けて開催し、毎回80人の作家を参加させる計画で、二年間で500から600人程度の少数民族作家を育てることが予定された。1959年からはじまり、2カ月ないし半年かけて、中国作家協会は青年作家の作品の初稿を修正するため、二回あるいは三回程度講習会を開催する。各地の作家協会は毎年また二年毎に一回くらい青年文学者会議を開き、ベテランの作家たちは創作経験を青年文学者に伝達し、青年作家の創作レベルを向上させる。ベテラン作家の創作指導は青年作家にとってとても有益であり、各地の作家協会は青年作家の作品を老練作家に推薦し、創作指導を受けさせる。青年作家の作品集の編集や作品に対する評論を集め、中国作家協会は毎年、論文集にまとめて出版する。各地の作家協会も各自で同じ事を行うことを広める。1962年までに作

家協会は関係する政府機関の協力のもとで、作家の訓練や文学者育成の専門学校を開き、中国作家協会は各兄弟民族の作家を育てることを重要な任務として与える。各地の出版物は兄弟民族の作家たちの作品やそれに対する評論を積極的に文芸雑誌に掲載する。そして各兄弟民族文学の漢語訳や、漢語文学の兄弟民族言語への翻訳を進めると共に相互翻訳の人材を育成し、1956年の内に内モンゴル自治区、新疆ウイグル自治区、朝鮮族自治州に中国作家協会分会を設立することや条件が整った地域に其の民族言語の出版物を定期的に発行することなどが細かく定められた。

ここで規定された、内モンゴルを含む少数民族作家の育成方法、育成規模、創作言語の問題はかなり具体的で、非常に細かい項目が定められた。その後の内モンゴルにおける現代文学は一律にこの規定に則って創作され、党の文芸思想下に統合された。

以上、現代内モンゴル文学と政治の関係について見たが、この時期から政治と文学が一体化され、モンゴル文学の従来からの伝統が途切れた。一方、中国文学の一部として、少数民族文学・兄弟民族文学・或は辺境地域の文学として位置付けられた。しかも、文学の優劣を決める標準は、権力側による評価によるものであり、作家も与えられた仕事をすると共に党の政策を宣伝する「党の喉舌」という二重の責任を果たさなければなら状況が定着した。

### 3. 政治とウランバガナの文学活動

以上でみてきたように、共産党による文芸路線が急速に少数民族地域に対しても適用され、文学は目まぐるしく揺れ動く政治路線に対して貢献することを一元的に求められるようになった。その結果、個別の文学者は一種の「文芸党官僚」として、その言動が著しい政治性を帯びようになり、さらなる政治的変動をかたち作るようになってゆく。以下では、激動の現代内モンゴルのなか、ウランバガナという作家の経歴や体験などを社会の背景と絡ませながら分析し、彼の文学活動を実証的に検証する。

#### 3.1 ウランバガナの生い立ち

1928年～1949年

ウランバガナは1928年10月に内モンゴルホルチン左翼中旗の南部に位置する小さな村に生まれた。本名はボヤンダライ（漢語表記は宝音達頼、宝代来、幸福の海を意味する）であり、後述するように作家デビューの際にウランバガナ（赤い柱の意味）と改名した。また、呉風翔という漢語の名前も使用していたという。

ウランバガナは、家が貧しかったため、9歳まで学校に通うことができなかった。16歳になって、ようやくトラックの運転手だった兄の稼ぎで小学校を卒業し、1943

年（16歳）から満洲国陸軍興安学校（王爺廟）で中学生を送った。しかし、中学を卒業する前に終戦を迎え、余儀なく中退せざるを得なくなった。当時彼は18歳だった。

終戦を契機に、満洲国領内のモンゴル人民族主義者ハフンガ（内モンゴル人民党員）らによるモンゴル民族自治自決運動が王爺廟で展開され、同地にいた多くのモンゴル人青年たちがそれに参加するが、ウランバガナは中国共産党の革命陣営に参加した。18歳の青年ウランバガナは如何にして中国共産党と出会ったのか。その経過が未だに不明だが、なぜ彼と同郷のハフンガらの民族運動に合流しなかったのかについても謎は残る<sup>9)</sup>。いずれにしても、1945年の冬、彼は内モンゴル八路軍騎兵部隊に入隊していた。1946年から八路軍の遼寧、吉林軍区での活動に参加し、中国共産党の革命に熱心だったことから1年もたたないうちに内モンゴル八路軍騎兵部隊作戦参謀長になった。1947年に彼の属する部隊が東北地域で共産党に反対勢力に向かって全面的な攻撃をした際、負傷した原因で戦場を離れた後、興安軍区政治部宣伝員として共産党占領地域に派遣される。この時期から彼は、魯迅文学や漢語訳のソ聯文学に出会い、『日日夜夜（昼夜）』や『鋼鉄是怎样鍊成的（鋼鉄は如何にして鍊成されたか）』などの作品を愛読していたことを自ら回想している。中学二年生の学歴を持つウランバガナにとって、中国文学やソ連文学との出会いは、後の作家を志す上で大きく影響したと考えられる。

1948年1月1日、中国共産党の内モンゴルにおける機関紙として『内蒙古日報』が（モンゴル語版と漢語版）ウランホト（王爺廟）で創刊される。同年5月に、ウランバガナが『内蒙古日報』社に新聞編集員、美術組組長、並びに記者の身分で着任する。『内蒙古日報』の記者を務めてから多くの記事と報道文章を書いた。この時点でまだウランバガナという名前を使用しておらず、ボヤンダライという名前で執筆活動をしていた。新聞社の記者という体験が、彼の作家生涯における準備段階とも言える。彼の短編小説のほとんどにルポルタージュの特徴がよくみられることも、記者出身の彼にとっては、一番使いやすい創作手法だったのかも知れない。その点で、ウランバガナの作品の中で、芸術の真実性が実際生活の真実と最も近かったことも窺える。

### 1949年～1966年

1949年に、ウランバガナはフフホト市内の中国共産党学校（党校）で研修を受けたが、その期間中に「過去の満洲国時代の不名誉な経歴」が原因で、中国共産党の予備党員の資格を剥奪される。この打撃からウランバガナは、大きなコンプレック

---

<sup>9)</sup> 楊海英2011「基礎資料（3）」p702

スを抱えるようになり、そうした劣等感から生まれた嫉妬がその後の様々な政治運動中で、モンゴル人作家同士、特に党員作家との対立として浮上する。党員の資格を剥奪されたウランバガナだが、文学作品を通して党に対する忠誠心を強烈にアピールし、名誉を取り戻そうと試みる。そして漢語で創作する革命的作家の軌道を躊躇なく進めてゆくように決意する。また党に対する忠誠心を示すことによって革命的作家になる機会を与えられ、誠実な模範作家として、党の文学官僚育成の対象に「選ばれた」のである。

1949年10月から長編小説『草原烽火』の執筆を契機に、中国共産党や偉大なる毛沢東に忠誠を示し、「幸福の海」＝「ボヤンダライ」は、共産主義の「赤い柱」＝「ウランバガナ」に改名してゆく。作家デビューに伴い、公職もつき、1950年に張家口で、『内蒙古日報』東部版の美術組長に任命される。

こうして文学者の路を選んだウランバガナだが、非母語の漢語で創作するのは容易なことではなかった。当初ウランバガナの漢語のレベルは非常に低く、何百字のごく簡単な手紙すら書けない状態だった<sup>10)</sup>。実は、漢語のレベルが低い、創作体験の薄いというのがウランバガナ一人だけではなく、当時の漢語で創作するモンゴル人作家たち共通の特徴でもあった<sup>11)</sup>。建国当初、漢語で創作するモンゴル人作家が少なかったものの、共産党の政治宣伝のため、漢語で創作するモンゴル人作家（その他の少数民族作家）の育成が必要となった。作家育成の手段として、会議を通しての思想改造<sup>12)</sup>、漢人作家による指導と共同創作<sup>13)</sup>、文学学習教室の運営など、実に様々な手段があった。ウランバガナもこうした訓練を受けたことによって小説家に育てられた。

### 3.2 革命的作家の訓練

革命的作家の道に於いてウランバガナの受けた訓練も幾つかの手段によるものであった。それは、①政治性質を持つ様々な文芸工作会議に参加し党の文芸政策を学習し、思想面の教育を頻繁に受けたこと。②文学学習教室に参加し、社会主義文学理論・創作方法などを徹底的に学んだこと。③権力者（党や政府の指導者）の評論評価などで全国的に影響のある新聞雑誌に掲載されること。などによって、作家及び作品が全国的に広く認知され、徐々に「優秀な作品」や「作家」として作り上げ

---

<sup>10)</sup> ウランバガナ：「我是怎樣開始写作的」、『萌芽』1959年10月1日第19期p7

<sup>11)</sup> 帯兄：「当代蒙古族漢語小説創作研究」博士論文、内モンゴル大学2011年5月

<sup>12)</sup> ナミヤ：『「17年間」のモンゴル文学における会議』、『内蒙古第大学学报』（モンゴル語版）2009年第6期、83-90

<sup>13)</sup> ナミヤ：「優秀作品とその時代性」、『内蒙古第大学学报』（モンゴル語版）2000年第4期、テグスバヤル：「20世紀後半内モンゴル作家群における『マルチンフ現象』」、『内蒙古第大学学报』（モンゴル語版）2015年第5期、1-21

られた。ウランバガナも実際にこういう風に作り上げられた「名作家」であった。

その中で幾つかの代表的な会議、文学研究、奨励キャンペーン、学術検討会について簡単に紹介しておこう。

一、文芸界会議について、ウランバガナの参加した文芸工作会議は多いが、ここでは彼の「党文芸家」になるまでもっとも影響力があった四つの会議を取り上げる。①1959年の「若手作家筆談会」である。筆談会は、北京で『萌芽』雑誌社によって組織された各民族の若手作家が参加した規模が最も大きい会議だった。会議を先立って1959年9月26日、ウランバガナは建国記念活動に参加するため北京に赴いた。筆談会に参加したのはこの活動の期間中だった。筆談会でウランバガナが全国文化教育戦線先進工作者として選ばれた。②1960年12月17日に内蒙古第二次文芸界代表大会で、ウランバガナは中国作家協会内蒙古分会第二期副主席に選出された。③同じく1960年12月に開催された内モンゴル自治区文芸工作者第二次代表大会は第三次全国文芸工作者会議の精神を取り入れ、第一次大会以来の成果をまとめ、党の文芸政策を敵対する勢力や、修正主義、資本主義思想と断固として戦う文芸政策方針を示し、ブヘ<sup>14)</sup>は文聯の主席に選出され、ウランバガナは作家協会副主席に選ばれた。④1963年10月に内モンゴル自治区文芸工作者聯盟代表第二届拡大会議が開かれた。この会議では同年4月に開かれた全国文化芸術家聯盟第三次理事会第二次拡大会議の精神が伝えられ、革命文学家陣営を育成し、文学芸術は現在の革命闘争の精神に従い、民族言語による創作を強化するとした。会議はウランバガナ、ア・オソルら13人を内モンゴル自治区文化芸術界聯盟委員に選んだ。

二、ウランバガナに最も影響を与えた文学学習の場となったのは、1956年5月に中国作家協会文学研究所での研修と1960年10月10日から三年間続いた「内蒙古文芸研究班」である<sup>15)</sup>。この文芸研究班について1961年11月30日の「新華社」のフフホト通信は、「全国に影響のある小説『草原烽火』の著者ウランバガナなどモンゴル族の青年作家や芸術家たち16人が最近特別に組織された文学芸術「研究班」で研修を受けた」と報道した。この「研究班」にはナ・サインチョクトとバ・布林ベヒ<sup>16)</sup>、マルチンフやボンソグ<sup>17)</sup>、文芸評論家のムンヘボヤンのほか、漢人詩人一人と小説家一人が参加していた。

三、優秀な文学作品を奨励するキャンペーンだが、文化大革命までの「17年間」で、内モンゴル自治区における党文学を発展させ、芸術家たちの交流を促し、作家間の意見交換、作家たちの創作意欲を向上させるために、優秀な文学作品を奨励す

---

<sup>14)</sup> ウランフの長男、元全人代副委員長

<sup>15)</sup> 内蒙古「文芸研究班」は10月10日に開学、1960年10月27日の『内蒙古日報』

<sup>16)</sup> バ・布林ベヒ（1928～2014）内モンゴルを代表する詩人

<sup>17)</sup> ボンソグ 内モンゴルを代表する漢語創作作家の一人

るキャンペーンを6回にわたり実施した。ウランバガナの長編小説『草原烽火』は1962年の内モンゴル自治区文芸賞を受賞している。

四、1959年に『内モンゴル自治区文学史』を編集する際に行われた長編小説『草原烽火』をめぐる討論会である。『内モンゴル自治区文学史』は、内モンゴル現代文学史上、初めて漢語で書かれた文学史であり、内モンゴル大学中国語言文学系とモンゴル語言文学系が共同で編集した文学史である。内モンゴルの文学が中共の文芸政策の変動に合わせて、如何に創作され、発展してきたかという状況を系統的に総括した内容であり、ウランバガナの作品は学術討論会で高く評価された。内モンゴル現代文学を代表する作品として青年作家ウランバガナの『草原烽火』を重要なテーマとして討論し、討論会に計140人余りが参加した。後に討論内容が『『草原烽火』評論集』のタイトルで内蒙古人民出版社から出版された。そこで『草原烽火』が1958年大躍進以後の内モンゴルの重要な文学作品として評価された。

ウランバガナは以上のように様々な「訓練」を受けたことで革命的作家として認められ、その名誉がさらに体制内における社会的地位によって保護された。例えば、1964年に内モンゴル自治区の最高指導者のウランフーは、ウランバガナを中国作家協会内モンゴ分会主席に直接任命し、同年12月にウランバガナは、中華人民共和國第三届全国人民代表大会代表（内蒙古代表は55人）、1965年1月に中華人民共和國第三届全国人民代表大会民族委員会委員（全114人）にそれぞれ選ばれた。同年、ウランフーの長男ブへにより内蒙古文聯の副主任に任命されるくらい、一作家の身分から内モンゴル自治区を代表する人民代表、民族委員となり、国家法律制定機関や党の民族政策を制定する機関の仕事に携わる者として、徐々に政治の場でも姿を現すことになった。

#### 4. 『草原烽火』の誕生経緯

##### 4.1 『草原烽火』の創作過程

『草原烽火』の創作についてウランバガナは「1947年から本小説を創作する計画があった。しかし、五百字の手紙も書けなかった当初の私に、創作経験が不足であり、漢語での創作は困難だった。そのため、最初にモンゴル語と漢語の両言語で二万字程度の原稿を書いたが、結局文学作品として完成できなかった……創作を本格的に開始したのは1949年10月からであり、その後1956年末までのおよそ八年間で、重さ何十キロの原稿を完成させた。その中から120万字余りの原稿（合計四部）を整理したのが、長編小説『草原烽火』の初稿である」<sup>18)</sup>と記録している。五百字の

---

<sup>18)</sup> ウランバガナ：「写作『草原烽火』的几点感想」、『文芸報』（半月刊、1958年第24期、総232号）

手紙を書くことすら困難だったウランバガナが、120万字の長編小説を書き上げたことから、作家としての八年間の努力が大きかったと思われがちだが、実際にその間に名作が生まれるまでにどのような創作プロセスがあったのか、誰もそれを追求しなかった。八年間かけて完成した原稿は出版されるまで更に二年間の修正を待たなければならなかった。ウランバガナの書いた原稿の主題が、時の政治的要求を満たしていなかったためである。

原稿の内容は、内モンゴル東部地域の1930年代から1940年代までの歴史を背景に、モンゴル地域に侵入した日本人と結託するモンゴルの王公という「反動人物」と彼らに抵抗する王公支配下の「奴隷」たちである貧しい若者バトジャルガルと彼の恋人のオヨンチチゲの奮闘を描いている。結論は、奴隷たちが、封建王公と日本の侵略者を追い出して、幸せな生活を送るとなっている。この内容の作品を最初に完成した後、ウランバガナは、内モンゴル自治区の高官たちに見せて、意見を求めたところ、克力更という高官が「わしら根本から紅い延安派がまだ自分たちの歴史を書いていないのに、お前ら偽満洲国出身の日本刀をぶら下げた連中がそれを書いてどうするのだ」と言いながら原稿を床に投げ捨てたという<sup>19)</sup>。つまり、克力更ら革命根拠地延安で洗脳された延安派は日本的な近代教育を受けた東モンゴル出身の知識人たちを低く見ている。

その後、ウランバガナは自治区の最高責任者のウランフーに呼ばれ、原稿の修正に関して、「作品の中で、もっと中国共産党の正しい指導を書きこまなければならない」と指示された。そして、同年12月にウランバガナは内蒙古党委員会の指示を受けて『内蒙古日報』社から中国共産党内蒙古委員会宣伝部文芸処に転職し、専ら長編小説『草原烽火』の修正に専念した。それから二年間の時間をかけて、原稿を大幅に書き直して、「李大年」という架空の地下共産党員を創出した。最終的に漢人共産党員の李大年がモンゴル族の反日闘争をリードし、革命の勝利へと導くストーリーに書き換えた。こうしてできた原稿が1958年初めころ、中国青年出版社に採用されることになった。しかし、出版社の検閲によって、改めて修正する必要があると判断された。出版社側が、ウランバガナを北京に呼び寄せて、編集者に指名された唐微風という人物の直接的な指導の下で作品の再度修正が命じられた。そこで、ウランバガナは、編集者の唐微風と八ヶ月間の共同生活をしながら原稿の修正に専念した<sup>20)</sup>。

やがて1958年9月に、『草原烽火』が中国青年出版社から出版され、一回目の修正作業が終了した。後述するように出版に伴い『草原烽火』に対する評論、評価の文

---

<sup>19)</sup> 楊海英2009『墓標なき草原』(下) P208

<sup>20)</sup> 江晓天2003「不该被遗忘的人」『人物写真・出版史料』第1期



章が相次いで中国各地の新聞雑誌に掲載されて、ウランバガナの知名度が一気に上がった。翌年の1959年に『草原烽火』は、人民文学出版社から再版される際、ウランバガナは原稿に再び修正を加えた。

1959年の2月から8月までの半年間、ウランバガナは中国作家協会が全国からの青年作家を中心に開けた特別講習会に参加した。『草原烽火』の二回目の修正は、ちょうどこの講習会に参加する期間中に行われた。今回の修正にあたり、漢人作家周立波と中国青年出版社の編集者の協力と指導も受けている<sup>21)</sup>。

1959年10月に『草原烽火』が人民文学出版社から刊行された後、当時中華人民共和国文化部部長だった瀋雁氷（茅盾）がその修正版と初版を比較しながら詳細な修正コメントをだした。計80箇所細かく修正を加えた。その中で作品の内容に対する肯定的な評価点は30箇所あった。筆者は、茅盾のコメントを『草原烽火』に対する三回目の修正と位置付けている。『草原烽火』は、その後も多くの出版社によって繰り返し刊行された<sup>22)</sup>が、その内容は殆ど茅盾の修正に従っている。なお、茅盾のコメントを付けた『草原烽火』が1996年に「茅盾眉批本文庫」の一部として出版された。

以上、『草原烽火』の創作修正のプロセスを見てきたが、それは作者であるウランバガナ一人の手で書いたものではなく、作品の主題から主人公まで党の直接的な指導のもとで決められ、創作過程は編集者や漢人作家の指導のもとで完成されたことが明らかである。それはいわば「政治的な共同創作」の産物であるといえよう。

## 4.2 『草原烽火』の知名度と権力者

このように、作品の創作のみが共同作業によって生産されるだけでなく、作品に対する検閲や批評も計画的、組織的に権力の上層部から実施するのが社会主義リアリズム文学の特徴である。執筆開始から初版が出るまで十年間の長い年月をかけて生産された『草原烽火』の原稿を優秀なプロパガンダ文学作品として社会に認めってもらうには、よりレベルの高い権力者による評価が必要とされた。次に、『草原烽火』が名作に生まれ変わったことに触れよう。

1958年9月に、『草原烽火』の初版が出版された後、最初の書評を作家協会の機関誌「人民文学」に掲載したのは非共産党員で建国後教育部副部長も務めた葉紹均と葉聖陶であった。彼が「読『草原烽火』」<sup>23)</sup>というタイトルの書評を書き、「『草原

---

<sup>21)</sup> ウランバガナ：「後記」、『草原烽火』人民文学出版社、1959年

<sup>22)</sup> 筆者の統計によれば、長編小説『草原烽火』に11種類（印刷回数は計19回）のテキスト（モンゴル語版1と朝鮮語版1を含む）、2種類の絵本、3種類の脚本がある。詳細は『草原烽火』テキスト表を参照されたい。

<sup>23)</sup> 叶聖陶：「読『草原烽火』」『人民文学』1959年1月 103-105

烽火』はモンゴル人青年作家がホルチン草原の蒙漢両民族の人民は党の指導の下で封建的なモンゴル人王公や日本帝国主義者と闘った歴史を描写したことを高く評価し、延べ五千字の評論文を寄せた。この評論文はその後ずっと『草原烽火』の序文として使われていた。

同年、姚文元も「評『草原烽火』」<sup>24)</sup>という書評を発表し、そこで「我が国の文学史において、はじめてかくも覚醒した奴隷の姿を描いた作品である。党の指導を力強く表現した、蒙漢両民族の団結、友情、共同の運命、共に歩む道を明確に示したことで、この小説を我国の優秀な長編小説として評価すべきである……社会主義文学はこのように共産主義精神で以て人々の精神世界を改造すべき」で、『草原烽火』は我国の社会主義文学の喜ばしい成果である」とより具体的に評価した。彼は続いて「今後作者が、小説の第二部を作成し、バトジャルガルとオヨンチゲの成長を力強く描くことを期待している」と続編の早期誕生までリクエストしていた。このリクエストに応じて、続いて『烈火燎原』と『燎原烈火』が書かれた。

トゥメンは、「『草原烽火』は、当面の内モンゴルの社会生活をリアルに反映した良い作品だと思っている」、「それは近年現れた作品の中でもとりわけ優秀な作品である」。「同作品を読んだあと、人々に草原の過去の歴史状況を甦らせるものがあり、我々の党や祖国である大家族が互いに愛する心を更に強めてくれる良作品である」<sup>25)</sup>と評価した。

そのほか、1960年代初めころ、中国作家協会副主席だった老舎は、数名の作家や芸術家とともに約二ヶ月間内モンゴル自治区を旅した際、首府のフフホトに立ち寄り、「多くの古い友人と再会し、手を握って喜んだ。詩人のナ・サインチョクトは、新詩集を贈ってくれた。小説家のウランバガナは、いつも満面の笑みで、私たちの相手になってくれた、彼の『草原烽火』は良い作品だ」<sup>26)</sup>と振り返った。

以上は文芸界における著名人による、『草原烽火』に対する評価を紹介したが、実は毛沢東も『草原烽火』を高く評価したことがあったという。毛沢東は「作家の愛憎の立場は明瞭で、党の指導下における蒙漢両民族の革命闘争を描いたのは良いことだ。内モンゴルにも漸くこの種の作家が誕生した」と、喜んでいた<sup>27)</sup>とのエピソードがある。

このほかに、江青や漢人作家の丁玲、周立波、周揚らも、ウランバガナの作品や性格を高く評価していた。ここまでは『草原烽火』に関する当時の評価を見てきたが、それは殆ど作品の政治性に対する評価であり、文芸作品そのものの芸術性やは

---

<sup>24)</sup> 姚文元：「評『草原烽火』」『文芸報』1959年第24期 2-8

<sup>25)</sup> トゥメン：一部優秀な作品—『草原烽火』、1959年3月23日『内蒙古日報』P3

<sup>26)</sup> 老舎1962「内蒙古紀行」『人民中国』

<sup>27)</sup> トゥメン2005『康生和「内人党」冤案』

「文学性」についてあまり触れていないことが分かる。つまり、政治的功利主義に適した作品が優秀な作品と認可され、影響力を持つ人物による評価によって、名作としての地位は社会に定着していく。やがて『草原烽火』は、当時中国における少数民族文学は、どうあるべきかを示す究極の例として毛沢東に評価され、愛国主義文学の一つのモデルとなった。

#### 4.3 『草原烽火』の続編—『烈火燎原』と『燎原烈火』

『草原烽火』が出版され、姚文元をはじめとする権力者から「党の指導下で革命の勝利を勝ち取った主人公の二人が、どのように成長したかを記されたい」という声が上がったのをうけて、ウランバガナは、1959年から1964年にかけて長編小説『烈火燎原』と『燎原烈火』を創作し、『萌芽』や『収獲』にそれぞれ連載されたが、『草原烽火』程の反響はなかったものの、人物像など創作の面での成長が評価されていた。女性主人公のオヨンチチゲについて、文学評論家の奎曾は、「作家の描く革命的な女性像が『草原烽火』の続編『烈火燎原』の中で更なる発展を遂げた」<sup>28)</sup>と評価した。もっとも、続編の原稿が完成する前に文化大革命が発生したことで、ウランバガナは一旦文筆活動から離れて政治闘争に身を投じることになり、『烈火燎原』と『燎原烈火』の再創作を行ったのが、文化大革命が終了後のことであった。しかも、次章で詳述するが、ウランバガナは内モンゴルにおける文革の責任を問われて懲役15年に処せられたため、続編の創作は刑務所の中でなされた。この時、『烈火燎原』のタイトルは『科爾沁戦火』に変わったが、続編の完成によってウランバガナ文学の政治利用も再び表に出てきた。

まず1992年8月に「草原烽火三部曲」として、『草原烽火』、『科爾沁戦火』、『燎原烈火』が南京の江蘇文芸出版社から出版された。この出版の際、ウランバガナは「……さまざまな原因で、『草原烽火』の続編が公開されず、読者に会うことができなかった。執筆してから34年も経過した現在、江蘇文芸出版社のおかげで、小説の第二部『科爾沁戦火』と第三部『燎原烈火』が出版されることになった。この際、『草原烽火』にもう一度詳細な修正を加えた。今度この修正本も江蘇文芸出版社から出版されることになった……」と説明している。ここから『草原烽火』に改めて修正を加えたことが確認できる。これは『草原烽火』の第四回目の修正である。

その後、1995年の抗日戦争勝利50周年を記念して、貴州人民出版社が「中華の魂叢書」を刊行した。同シリーズを出版する理由について「抗日戦争時期と同じく、改革開放に伴う経済建設の時期にも国民に強大な精神力が必要となる。しかし、文学の精神が以前より弱くなり、その時代的精神や中華民族の魂を呼び起こす」ため

<sup>28)</sup> 奎曾「『草原烽火』中的女性形象」、『『草原烽火』評論集』1959年、83-93

であると解釈した。ウランバガナは、服役中ながら編集委員会のメンバーに選ばれ、抗日戦争を記念した中華の魂叢書の編纂に加わった。そして、8月に彼の『草原烽火』が叢書の一部として1万部印刷された。その後抗日精神を讃えた「中華の魂叢書」の一部となる『草原烽火』は、2008年に人民文学出版社から出版された。この時に、改めて書かれた序文に、「この作品は愛国主義教育、革命英雄主義教育の良い教材であり、まる一代の人々の世界観、人生観の形成に大きな役割を果たした作品である」<sup>29)</sup>と再び高く評価された。

## 5. プロパガンダ小説の役割

### 5.1 『草原烽火』の舞台化

ウランバガナの『草原烽火』が社会主義リアリズムの傑作として政治的に演出された以上、それは単に文字だけの世界ではなく、さまざまなかたちで「革命芸術」化されるのは必然であった。まず、演劇化された『草原烽火』は1959年2月から1960年9月までの間、内モンゴルの劇場で上演され、1963年8月には北京の広和劇場と吉祥劇院にて上演された。内モンゴルでの劇場は内モンゴル自治区の首都フフホト市内の「職工礼堂」、「人民劇場」、「大観劇場」、「赤い劇場」など劇場にて、それぞれ上演された。皮肉なことに、文革後の1987年10月31日と11月1日の二日間、ウランバガナに対する内モンゴル文革の責任を追求した初の公開裁判も、かつて名作『草原烽火』の劇が上演された名劇場「赤い劇場」で開かれた。

『草原烽火』は内モンゴル東部地域の1930年代から1940年代までの歴史を背景にして書かれた歴史小説である。しかし、当時同作品が優秀な作品として作り上げられた根底には「党の正確な指導」と「蒙漢両民族の団結」という時代の主題があったからである。文学作品は、識字率が低かった当時においては宣伝の道具として限界があったため、そうした人々にとって演劇は政治宣伝をするのに何よりも直接で、楽しい手段であった。『草原烽火』の舞台化された原因も「党の正確な指導」と「蒙漢両民族の団結」を民衆の中でさらに広く宣伝するためであった。『草原烽火』には「話劇」、「晋劇」、「歌劇」、「京劇」と多様な脚本が作られ、上演された。

### 5.2 『草原烽火』の諸脚本について

現段階では、『草原烽火』には少なくとも5種類の脚本があることは確認された。

- ① 内蒙古芸術学校電影戲劇演出グループの四幕九場の話劇脚本1959年2月。
- ② 呼和浩特市晋劇団の晋劇脚本1959年7月。

---

<sup>29)</sup> 卢惠龙「历史回眸」『中华之魂丛书』序 貴州人民出版社 1995年 p2

- ③ 内蒙古民族実験劇団の漢語版の歌劇脚本1959年。
- ④ 内蒙古民族歌劇団のモンゴル語歌劇脚本1960年4月。
- ⑤ 北京京劇団の15幕京劇脚本、1959年

これらの脚本は、今までに研究者に注目されてこなかったため、筆者は『内蒙古日報』など当時の新聞に掲載された広告欄から見つけた『草原烽火』の各種の劇が主演された日時、場所など上演に関する情報及び、舞台化された『草原烽火』に対する評論をもとにまとめた。

1972年、江青の意に沿って北京京劇団が『草原烽火』を京劇としてアレンジして演じることを決定した。江青は、汪曾祺ら3人を内モンゴルの草原に2か月間調査に派遣した。彼らは江青に「過去に日本人は一度も草原に入ったことはない、草原に入ったのは大青山の遊撃隊だけだ」と報告した。江青は「それは、よかった、自由にできる、お前らもそれを考えなさい」と指示した。その後、京劇の脚本は汪に書かせた。それによって汪は「牛小屋」から解放され、革命模範劇（样板戏）の創作に参加したのであった<sup>30)</sup>というエピソードがある。

このように舞台化される中で、『草原烽火』に幾つもの脚本が編集された。恐らく上演する場所や視聴する相手によって劇のジャンルと脚本を決めていたように思われる。もちろん、この決定過程についても不明なところが多く、さらなる研究が必要となるが、舞台上で上演されることによってプロパガンダ作品として一層役割を果たせたことには疑問の余地もなからうか。さらに、『草原烽火』は、舞台上で上演されるとともに、絵本の形でも広がった。

## II. 文革中

### 1. 文化大革命とウランバガナ（1966～1976）

かくも「時代の寵児」となったウランバガナの運命は、まさにウランバガナが「革命的文芸人」として参加した文化大革命そのものによって暗転する。文化大革命は中国共産党の『歴史決議』によって「十年の災難」とされ、全国的規模の混乱と理解されるのが一般的であるが、実際には地域によって異なった性格があり、とりわけイデオロギーと地域エリートとの関係性、そして個別地域の社会文化的状況に複雑な影を及ぼし、さらには致命的な打撃を与えた。内モンゴルをめぐって、既に「内モンゴル人民革命党」事件があったことが知られており、当時のエリートが被った被害は甚大であったことが知られている。ただ、この事件が具体的にどのような過程を経て深刻化したのか、中ソ対立やウランフーなど上層部をめぐる問題について

---

<sup>30)</sup> 汪曾祺 1978年4月「我的検査」歴経几年文革加風雨、1978年9月『総合検査』

は先行研究において論じられるが、とくに人々の「社会主義覚醒」を促す文芸界における内人党事件の真相に関する研究は未解明の部分が多い。そこで本章では、同事件に大きく関わったウランバガナの軌跡を整理し、内モンゴルにおける文化大革命について、初歩的な検証を試みる。

#### ウランバガナと「内蒙古揪叛国集团聯絡站」

中国の文化大革命は「5・16通知」から全面的に発動したとされるが、内モンゴルではその一年前の1965年からすでに内モンゴルの党・政・軍の三権を握っていたウランフーに対する批判が始まる。当時、内モンゴル文芸界の実力者だったウランバガナは、かつての上司を庇い、ウランフーを擁護する立場に立った。その時、ウランフーを擁護しても、ウランバガナに対する批判はなかった。だが、翌年の「前門飯店会議」でウランフーが完全に打倒されたことによって、ウランバガナも「ウランフーの黒幫分子」だと批判を受けはじめた。当時、ウランバガナはトウメッド旗の「四清」工作団に加わり、社会主義教育運動に参加していた。そこで同僚のマルチンフと共に批判にさらされ、「黒幫分子」、「作協黒副主席」、「人大黒代表」など、共産党内モンゴル委員会宣伝部副部長だったテグスによって罪をなすりつけられた。最初の頃は、このような批判を彼は当然のことながら受け容れなかった<sup>31)</sup>。

1967年6月18日、滕海清、呉濤、高錦明の三人は、内モンゴル自治区党委員会の中で、内モンゴル革命委員会籌備小組を組織し、同年11月1日に全国で8番目となる内モンゴル革命委員会が成立した。当革命委員会は、一元化した指導方式をとり、党、政府、財政、文教、司法の全ての権力を掌握した。

一方、「5・16通知」に応じて、内モンゴルの各機関内にも革命委員会が相次いで組織され、やがて、ウランバガナの属する内モンゴル文聯にも革命委員会が成立した。そして、その革命委員会に自治区党委員会から工作員代表が派遣されてきた。派遣されてきた党の工作員らは、ウランバガナに不満を持ち、彼と対立する姿勢をとった。このように、時勢が変わっていくのに伴い、内モンゴル文聯の内部も幾つかの派閥に分裂する状態になり、派閥ごとにそれぞれ造反派が組織を設立する。作家協会内部においてそれぞれの対立するグループを批判することが始まり、極めて短期間で内モンゴル文革が勢いを増した。

ウランバガナの率いる組織「東方紅」は1966年12月に成立した。文聯の中で「東方紅」と対立した造反派組織は「翻江倒海」であった。「翻江倒海」の大字報には、「ウランバガナはいつも自分の身分を隠している。実に彼は大地主の搾取階級出身で、偽満洲国の軍官学校を卒業後、我が党が率いる興安軍区政治部にいたころ、あ

---

<sup>31)</sup> 啓之2010 P244「烏蘭巴干採訪記録」

る時期に敵に捕まって、彼らに跪いて投降した不名誉の過去があった<sup>32)</sup>とウランバガナを攻撃した。これをめぐって両方の対立がさらに増して行く。

そうした対立が数ヶ月続いても纏まった結論がなく、結局これの是非を明らかにするため、ウランバガナの故郷において調査することになった。そして、1967年8月に、両陣営はそれぞれ代表を派遣し、ウランバガナの故郷ジリム盟で調査を行った。

代表団が彼の故郷で調査している間、事態の変化に不安を感じたウランバガナは、北京に赴き、地質学院の「東方紅」と連絡を取り、約二ヶ月間北京に滞在しながら、文革について情報収集を行った。その期間中、ウランバガナは、文革を支持する三篇の文章を地質学院の「東方紅」の小字報に発表した。そのなかで、二篇はウランフーを批判したものであった。ウランフーを庇う立場から反ウランフーに転じる。

ウランバガナが北京に滞在中、内モンゴル文革の実権者である滕海清も北京に来ていた。1967年8月10日に、ウランバガナは、北京市国家民族委員会二階にある会議室に滕海清に会いに行き、ウランフー批判を含む文化大革命の話をしたほか、彼自身の長編小説『草原烽火』についても紹介した。紹介する際、かつて姚文元らの高い評価を受けたことをアピールし、滕海清の好感を得ることに成功した。

その場において、ウランバガナは、滕海清に向かって、かつてウランフー、ハフンガ、劉春らが、彼に様々な迫害を与えたと訴えた。迫害とは、1964年に起こった『草原烽火』に対する劉春の批判のことだと考えられる。当時、ウランバガナは全国人民代表として北京で第三期全人代会議参加中だった。同会議に自治区党委書記だった劉春も出席していた。会議の期間中、劉春が「お前が書いたあの二冊の本はでたらめで、ウランフーを初めとする党の指導を誠実に書いていない」と彼を批判したことがあった。ウランバガナも、劉春に向かって「当時東部地域に共産党などいなかった」と即座に反論したようである<sup>33)</sup>。

ウランバガナの訴えを聞いた滕海清は、このことを自治区革命委員会籌備小組に伝え、彼を護るよう勧めた。その勧めどおりに、ウランバガナは、間もなく文化大革命実権派の陣営に加わって行動をするようになった。「内蒙古揪叛国集团聯絡站」の成立はその結果である。

### 「内蒙古揪叛国集团聯絡站」の発足経緯

ウランバガナが率いる「内蒙古揪叛国集团聯絡站」は、1967年12月に発足される。同聯絡センターが発足する前に、内モンゴルのフフホト市には数多くの聯絡セ

---

<sup>32)</sup> 啓之2010 P245「翻江倒海」大字報「打倒変節分子烏蘭巴干」

<sup>33)</sup> 啓之2010 P244 烏蘭巴干採訪記録

ンターという看板を掲げた群衆組織があった。全ての連絡センターが自治区革命委員会に所属する。革命委員会は、それらの連絡センターは専門案件処理事務室（以下専案班と略する）を通して指導する仕組みになっていた。

1968年になるとフフホトで発足された連絡センターは、数百以上となり、組織的に混乱した。これを受け、1968年4月5日に自治区革命委員会が「關於調整各群衆組織」という文件を発行した。これらの組織を再編し、最終的に「内蒙古揪叛国集團聯絡站」、「呼三司専案辦」（リーダーは高樹華）と「揪哈聯絡站」（「ハフンガを抉り出す連絡センター」）の三つの組織にまとめた<sup>34)</sup>。

自治区革命委員会からこの三つの組織を残した理由を、毛沢東の最新指導方針に従い、最も適切な行動をしているためだと説明した。その後、「内蒙古揪叛国集團聯絡站」の活動が活発になり、1968年6月になると、ウランバガナは正式に内モンゴル文芸界における一連のキャンペーンの総指揮官に任命されていた。

なお、1968年6月14日、「聯合戦報」誌の第24期に、「連絡センター」など三組織は解散を発表していた。解散する際に、革命委員会から連絡センターの活動を特別に高く評価し、解散後もメンバーたちの身の安全を保障するとあった。「連絡センターは今まで、抉り出して肅清する運動の先鋒に立ち、十分力を発揮した。そのため、組織として解散されても、連絡センターのメンバーに対して、いかなる人も攻撃したり、中傷標榜したりしてはならない。もし、そのようなことが発覚すれば我々はその人に断行とした独裁措置を取る」という内容だった。

だが、連絡センターが解散してから半年後に、ウランバガナたちは「新内人党」として疑われはじめ、対立する造反派の迫害を受けて、各地での逃亡生活を余儀なくされた。

#### 「内人党専案組織」＝「内蒙古揪叛国集團聯絡站」の発足案

「内蒙古揪叛国集團聯絡站」の発足案は「内人党専案組織」の必要から提起された。最初に提案したのは、造反派組織「呼三司」のメンバーだったエンヘバトと鉄山の二人だった。エンヘバトは、内モンゴル大学モンゴル言語文学系の教師で、鉄山は彼の生徒である。1967年に二人は、内モンゴル大学で呼三司を代表して聯絡会議を招集し、「内人党専案組織」あるいは「連絡センター」を組織する件について協議した。

この会議でフフホトの各造反派組織は代表を派遣し、内モンゴル文聯からの代表はウランバガナとバトボヤンであった。内モンゴル日報「東方紅」の代表はエルゲニオーラとラシの二人だった。このほか内モンゴル軍区、内モンゴル大学、工学院、

---

<sup>34)</sup> 高樹華、程鉄軍2007 P341



師範学院などの造反派の学生代表計20人余りが参加した。参会者が「揪哈聯絡站」のような組織を立ち上げることで一致し、1946年にハフンガらが組織した「老内人党」及び、内外モンゴル合併を目論んだ歴史案件を専門的に追及するとした。

満洲国陸軍士官学校出身のウランバガナは、その時期の内モンゴル人民革命党に関する歴史に一番詳しいため、大会の推薦により聯絡センター立ち上げの準備作業を任せられた。閉会后、ウランバガナとバトボヤンは、「内モンゴル叛国集團聯絡站」を立ち上げる計画書<sup>35)</sup>を練り、自治区革命委員会籌備小組に報告し、支持を求めた。しばらくして返答は得られなかったため、ウランバガナ、エルデニオウラ、ラシ、バトボヤン、盧明輝ら五人が、内モンゴル軍区司令官滕海清を訪ねた。滕海清の側近の陳秘書官が彼らを出迎えた。

ウランバガナが訪問団の五人を代表して計画の内容を報告した。報告を聞いた陳秘書は「聯絡センターを立ち上げることは人民群眾の自由であり、我々は干渉することではない。ただ経費など資金面でのごことがあれば、自治区革命委員会籌備小組の高錦明や康修民に相談してほしい」と言った。当時自治区革命委員会は「内人党」を具体的に考える余裕もなく、一群眾組織の活動計画よりもさらに大きな計画を実施しようとしていた。

次にウランバガナらは、康修民を訪ねた。康は、「群眾組織を立ち上げるには自治区革命委員会の許可が必要である」とした。そして経費の問題を解決するため高錦明を訪ねる必要があった。革命委員会は最終的に彼らの計画を批准し、「内モンゴル叛国集團聯絡站」は自治区革命委員会専門案件処理本部事務室の直接指導を受け、経費は革命委員会の予算から定期的に支給することと、人員は各組織で準備調達するように指示された<sup>36)</sup>。

1967年12月8日に、経費が革命委員会から得られないため、ウランバガナらは高錦明宛に手紙を送った。内容は、①聯絡センターは設立して三ヵ月間、主な任務として、ウランフー、ハフンガ、テグスらの叛国集團を抉り出し、「内人党」や「内外モンゴル統一党」など反革命組織を徹底的に暴露し、プロレタリア独裁や毛主席の革命路線を護ってきた。②我々の組織メンバーは高錦明、権星垣、康修民の許可を得て任命された。③活動経費、内部検査、外地での調査費、資料代など合わせた二万円の予算を申請し、許可を求める。四日後の12日に高錦明から「経費の件について、革命委員会の後勤組が両者協議をしたあと判断する、我々は節約の原則に適した経費を支給する」という返答が届いた。

---

<sup>35)</sup> 啓之2010 P248

<sup>36)</sup> 「烏蘭巴干交代材料」「烏蘭巴干案卷」

## 「内蒙古揪叛国集团聯絡站」の発足

人材、経費、自治区革命委員会の支持も得て、聯絡センターは本格的に発足された。

1967年12月半ばころ、ウランバガナは内モンゴル文聯の建物の二階の会議室で会議を開き、組織の設置場所や関係責任者の仕事分担の内容などについて協議し、二日目の拡大会議で決議を取った。この聯絡センターは下に、「材料組」、「聯絡組」、「後勤組」の三つの小組を置いた。「材料組」の仕事は、内部検査や外地調査、各盟旗市から上がってきた資料を集め、整理した資料に番号を付けて、档案資料として保管する。またこれらの資料の貴重度に合わせたランクを付けて分類し、滕海清事務室或は革命委員会専門案件調査室に提供する。組長はバトボヤン。「聯絡組」の任務は、フフホト地区や外地の同様の組織と聯絡、情報交換する。組長は盧明輝。「後勤組」の任務は、資料の印刷、製本を担当する。組長は作家のジャラガーフである。ウランバガナはセンター長で、聯絡組の仕事も兼務し、センターを総管理する。副センター長エルデニオーラは後勤組を担当し、副センター長ラシは材料組の仕事をそれぞれ兼務することになった。

聯絡センターのメンバーは内モンゴル大学、工学院、語委、革命会辦公庁などから集まって、少ない時は20人、多い時は50人もいた。この聯絡センターは、最初文聯の内部にある造反派グループ間の対立から発展して、相手より優位であると見せるための臨時組織（1967年9月～1968年5月）<sup>37)</sup>だったことも当時者の証言で明らかになった。

聯絡センターの活動経費は全額「專案班」から支給された。経費のほか調査するに当たって、「專案班」が便宜を提供していた。特に、外部調査において、調査項目や活動綱領、紹介状まで「專案班」が様々な援助を提供していた。調査報告は、収集した資料に番号を付けて、「聯絡センター」の印鑑を押してから「專案班」に提出するようになっている。

## 2. 「内蒙古揪叛国集团聯絡站」と文芸界の批判運動

聯絡センター発足直後、ウランバガナは『新文化』『文芸戦鼓』などの新聞を発行した。それによって、内モンゴル自治区成立後に発表されたすべての文学や文化芸術作品を「反国家文学」に指定した<sup>38)</sup>。さらに、「北」や「民族」という文字が入っている作品や文章もすべてが「反国家文学」とされた。これは、内モンゴルにおいて「北」と言えばモンゴル人民共和国を聯想させ、「民族」という文字はモンゴル人

<sup>37)</sup> 啓之2010 P255

<sup>38)</sup> ウランバガナの『草原烽火』は唯一特別扱いされた

によるエスノナショナリズムにつながるものとみられていたためである。このようにして文芸界における批判運動が幕を開いた。連絡センターは批判闘争会議、批判文章の発表、作家に対する暴力などの手段を通してその批判運動を展開した。

### 展覧会を通じた批判闘争

1967年、フフホトにおいて二回にわたりそれまでの内モンゴル文化芸術作品を批判する展覧会が開催された。具体的に誰のどのような作品が批判されたのかは不明だが、その展覧会で外国との交流を持った者や外交事業に参加した者のほとんどが、外国に通じた陰謀者だとされた。特に、モンゴル人民共和国との交流に関わった内モンゴルの文化芸術家、作家は、厳しい批判の対象となった。

### 「鬼を統計する舞台」としての『文芸戦鼓』<sup>39)</sup>

ウランバガナらが発行していた雑誌『文芸戦鼓』には「鬼を統計する舞台」というコーナーが設けられ、多数の内モンゴル文芸界の責任者や職員がそこで批判されていた。当時、文革までに書かれた文学作品を「毒草」とするだけでは済まなかった。その作品を書いた作家を「叛国主義者」とし、徹底して打倒が求められた。さらに後述する「新内モンゴル人民革命党」を抉り出す運動が本格化すると、打倒の対象となっていた作家たちは「反革命、反国家、民族分裂主義者」として徹底的な人身攻撃を受けたのである。

このような文学者たちへの「暴力行為」について、文革後ウランバガナと同時代で内モンゴルの作家ア・オソルは、1978年5月に、北京で行われた「全中国文芸界「四人組」の滔天罪行を批判する大会」において、「これはすべてウランバガナが考え出したものである」と報告している。彼は、さらに「内蒙古揪叛国集團聯絡站を創設したウランバガナが、新聞雑誌を自分の言いなりに動かし、各地で演説講演を行い、民族感情を煽り、民族間の対立を激化させたうえで、当時批判の対象とされた人びとに迫害を加えた」と批判した。

### 四つの変化論

連絡センターは、「四つの変化論」(①内モンゴルの共産党組織は内モンゴル人民革命党が変化したものである、②内モンゴルの共産主義青年団組織は内モンゴル人民革命青年団が姿を変えたものである、③内モンゴル軍区の兵士たちはもともと満洲国の軍人である、④内モンゴルの幹部たちの本来の姿は王公貴族地主、牧主である)を作成し、まず協力者たちを募り、夜になると彼らが「告発」した「敵」とみなさ

---

<sup>39)</sup> ア・オソル1983 P193

れた人たちへの不法逮捕や家宅捜査を行った。その際、暴力や拷問脅迫によって、強制的に罪を認めさせることも少なくなった。こうした方法は、後には、過去の日本軍の拷問や国民党スパイ活動をはるかに超えるものだったと報告されている。

### 文芸黒線専制論

そしてウランバガナは「文芸黒線専制論」を提起した。彼は「寺は小さいものの鬼の風が強く、水は浅いものの中の亀が多い」と書いた貼り紙を文聯の入り口に貼り、「二つの政党、一つのシステム、二つの黒いライン」という罪を文化芸術家聯盟に被せた。こうして文聯（文化芸術家聯盟）内部での対立が始まったのである。

「二つの政党」とは内モンゴル人民革命党と内外モンゴル統一党であり、一つのシステムとはソ聯修正主義者スパイシステム、二つの黒いラインとは「××<sup>40)</sup>(ママ)の黒いラインと××の黒いライン」のことである。当時40人余りの作家が所属していた内モンゴル文化芸術家聯盟からおおよそ半数の20人以上の逮捕者が出て、迫害の対象となった。

当時批判運動を展開する際に、ウランバガナは姚文元らによる『草原烽火』へのコメントを引用して、中国共産党内モンゴル党委員会の指導部とともに、おおよそ20年もの間革命運動を展開してきた。そうして、彼は自ら「革命的作家」の称号を獲得することに成功した。文革後にはまた姚文元ら「四人組」と一体となり、文化大革命を推進したとされている。

### 内蒙文聯反党叛国集団に関する立案報告書

1968年6月13日、聯絡センターから「関於内蒙文聯反党叛国集団立案報告書」が自治区革命委員会に提出された。これは、聯絡センターと文聯の造反派組織が同年5月22日に合同で作成したものを、ウランバガナがまとめた報告書である。主な内容は、1968年3月27日の内モンゴル文芸界会議における滕海清の講話内容を実践に拡大した成果を報告したものである。

報告書の中では、文聯における肅清について「文聯のもっとも危険なところは、彼らの外国とつながりがあることだ。叛国文学の存在のほか、叛国集団の存在もあることだ。文聯のプロレタリア革命派は、何か月間の過酷な闘争を経て、やっとブへを始め、ジュランチチゲ（ブへの妻）、マルチンフなど文聯における反党叛国集団を抉り出した。さらに、膨大な叛国グループのリストや彼らの全作品のリストを作成した」と報告した。

当時、内モンゴル文聯の副主任、自治区作家協会副主席のウランバガナにとって

---

<sup>40)</sup> 活字化する時にあえて実の名前を隠して印刷した。

このようなリストの作成は簡単な作業であった。例えば、ジュランチチゲの映画脚本「フヘバートル」は西洋の国々を讃えたもので、マルチンフの「茫々たる草原」は露骨に民族分裂主義を宣伝したと断罪した。また、ア・オソルの小説「アラマスの歌」は北へ逃げる叛国的な思想があるとした。当時中ソ冷戦が極限に達し、モンゴルの草原を分かち国境線が中ソ対立の最前線となっていた中、ソ連とモンゴル人民共和国への思い入れを連想させるような「西」、「北」、「西北」という文字が入っている文学はすべて叛国文学であった。しかもこれらの言葉は往々にして文革期の禁止用語ですらあったのである<sup>41)</sup>。

### 3. 「内蒙古揪叛国集団聯絡站」と「内人党事件」

「新内モンゴル人民革命党」(通称「内人党」)冤罪事件は、文化大革命期の内モンゴル地域で起きた「当代中国の集団冤罪事件の最たる事件」と言われている。1995年12月に中共中央党校出版社から出版された『康生於「内人党」冤案』は、文化大革命における「内人党」冤罪事件に焦点をあて、この事件の一部終始を詳細に描いたノンフィクション著作である。本の著者は、中国の著名な軍事法、刑法学者で、中国解放軍軍事檢察院刑事檢察処元処長、副檢察庁、軍事法院副院長、中央軍事委員会法制局長を歴任したトゥメン(図們)将軍である。かつて林彪、江青反革命集団訴訟事件を含む多数の重大な訴訟事件を審理したモンゴル人裁判官でもある。

「内人党」特大冤罪事件の首謀者、中央側の支持者は、当時の中国共産党中央委員会常務委員の康生であり、内モンゴルにおける実行者は、当時内モンゴル軍区司令官、自治区革命委员会主任の滕海清であった。

このノンフィクション作品の88～99ページ(1996年モンゴル語版)において、ウランバガナについて「軍人出身の作家であり、文化大革命の時期に『内人党』の資料を捏造した『風雲児』である」<sup>42)</sup>と特に詳しく言及する。そして、「内人党」資料は滕海清、ウランバガナ、郭以青らがでっち上げたとしたうえで、政府主導の内モンゴル人民革命党肅清事件を時系列的に詳述している。

そこで本書の内容を簡単に概観したい。まず康生は、15日に開かれた各盟市からの指導者たちを前にして、内モンゴル人民革命党肅清の必要性について演説を行った際、内モンゴル人民革命党が解散せずに活動を続けてきた「鉄の証拠」として、高錦明は内蒙古自治区中部のウランチャブ盟で1963年に起こった「206冤罪事件」を挙げた。

高錦明と密接な関係にあった一人の人物は、内蒙古自治区党委員会代理常務委員、

---

<sup>41)</sup> 楊海英2009「基礎資料Ⅰ」P264

<sup>42)</sup> 呼斯勅2004 P232

党宣伝部部長、内モンゴル大学副学長の郭以青で、1965年5月から、内モンゴル東部出身のモンゴル人高官たちが「内外モンゴル合併を目指す民族分裂主義者集団」を形成していると政府機関に密告を繰り返していた。

この二名についてトゥメンは、モンゴル人作家のウランバガナに内モンゴル人民革命党に関する資料を作成させては北京から来た滕海清将軍に報告していたと記している。しかしトゥメンは本の中でウランバガナについてこれ以上深く言及していない。というのも、今日の内モンゴルで、文化大革命期のモンゴル人大量虐殺事件は、ウランバガナが提供した「内入党員リスト」によって実施されたことで、ウランバガナこそ最大の責任があると公式に断罪されているからである。しかし、ウランバガナは非共産党員の身分であり、中華人民共和国成立後、内モンゴル人民革命党に関するあらゆる資料はすべて「極密の档案」に分類され、厳重に保管されていた。文化大革命中にこれらの档案は人民解放軍に管理されていたから、少数の内部の人員以外にはそれを閲覧することは不可能である。したがって、文革時に内モンゴル人革命党に関する密告資料は、ウランバガナによって偽造創作によるものとするが、ウランバガナは当時の権力者たちと特別な繋がりを持っていたことを窺わせる。実際にそれらの資料を書き写したのは彼一人だけでなく、「ウランバガナ裁判」の時に、他の作家ジャラガーフの筆記もあることが判明された<sup>43)</sup>。

#### 「内蒙古揪叛国集団聯絡站」と「内入党事件」

1967年9月になると、1966年5月7日の「前門飯店会議」以来行われた『『当代王爺』のウランフーを首とした党内の資本主義の道を歩む民族分裂主義者、ソ聯モンゴルの修正主義者、スパイとして批判闘争する運動』の中で求心力を失っていた。そして、内モンゴルにおける肅清運動の重点は、かつて歴史において実在に存在していた「内入党」、「老内入党」から「新内入党」まで新しい批判闘争の焦点となった。フフホトでは、「ウランフーを揪む」「ハフンガを揪む」「叛国集団を揪む」など様々な聯絡センターの形式をとった組織が次々に現れた。この中でウランバガナは「叛国集団を揪み出す聯絡センター」のセンター長を務めた。

当時内モンゴル作家協会副主席だったウランバガナと内モンゴル日報社モンゴル語版政治部主任のエルデニオーラの二人が、1967年10月3日に、自治区革命委員会籌備小組に「烏蘭夫黑幫包庇一個大叛国集団的罪行的簡要報告」なる資料を提出した。報告書の中で、ハフンガの叛国的な罪を説明し、モンゴル修正主義者スパイのリストを挙げた。ハフンガが目指した内外モンゴル合併は「内入党」の綱領である。彼はウランフーの意志を受けて「内入党」の組織部長に任命され、内外モンゴル統

---

<sup>43)</sup> 楊海英2010「基礎資料2」P4～6

一を図ったのは叛国的な行動であるという。「老内人党」は歴史上の反動組織であったが、現在も活動を続けている。より秘密な地下組織となり、国外の敵対勢力と結託し、我が国の社会主義制度を顛覆しようとしている。まもなく「新内人党」も誕生したという。

内モンゴル言語文字委員会「東方紅」と医学院、農牧学院の革命戦闘員たちの組織「43人委員会專案組」が、二つの大発見をした。一つ目は、かつてハフンガラが組織した「内人党」は内外モンゴルの合併を主張していたことだ。二つ目は、この活動は、内モンゴル党委員会宣伝部長のテグスと関係があったことだ。そして彼らを批判するために根拠となりうる「内人党」の資料を集めた。この資料は文革期に初めて取り上げたいわゆる「内人党資料」である。

1967年11月13日、党中央が江青の北京文芸界座談会での講和を批准して伝達した。講演の中で江青は、「文芸界の状況は比較的に複雑である、敵は狡猾であるため、深く徹底的に潰さなければならない」と発言したことで、滕海清が勢いづいた結果、十日後には、自治区党委員会宣伝部副部長、内蒙古革命委員会委員テグスが打倒された。そしてテグスは、拉致され尋問されるうちに、「ハフンガより危険で、今現在自治区党委員会、革命委員会に潜んでいる悪質な分子である」とされた。こうしてテグスを糾弾したことで、滕海清は内モンゴル自治区の文化大革命を新しい段階に押し上げたと自画自賛した。これが革命委員会による、自治区文芸界を標的にした新しい肅清運動の始まりであった<sup>44)</sup>。

こうして、1967年末頃になると、「新内人党」の存在や活動は、自治区革命委員会や各種の造反派、揪み出す連絡センターの共通の認識になっていた。

テグスが打倒された後に、次のターゲットは実区党委員会書記処書記で、当時自治区の公安、検察、司法のトップ王再天とされた。彼は「前門飯店会議」で反ウランフー的な立場を取ったため、革命委員会に重用されたが、かつて「内人党」が出現した内モンゴル東部出身者で、1946年当初からウランフーの部下だったため、中央から不信の目を向けられ、1967年5月に滕海清が中央公安部長の謝富治に内モンゴルの公安、検察、司法の状況へのコメントを求めた際、ウランフーの指導下にあるものは良くないとされた。自治区の公安、検察、司法を執行する立場にある王は、内モンゴルで秘密裡に活動する「内人党」を擁護した罪から逃れなかった。そして自治区革命委員会から告げられた罪は、反革命修正主義者、民族分裂主義分子、ソ聯モンゴルのスパイ、ウランフー反党叛国集団の中心メンバーで、1953年に反党反革命組織を庇護した、1957年に民族右派分子、王公貴族、日本のスパイ、国民党のスパイを庇い、革命の組織を破壊した、というものであった。彼は内モンゴルでは

---

<sup>44)</sup> 啓之2010 P233

じめて打倒された「反ウランフーの英雄」であった。

1968年2月5日に、聯絡センターのウランバガナ、エルデニオーラ、ラシの三人は、北京軍区内にあるホテルで滕海清の秘書李良に会い、彼らの「聯絡センター」で造ったとされる「蘇・蒙修情報系統及叛国集団分布図」と「錫盟蘇・蒙修特務叛国集団分布図」という二冊の地図を提供した。この地図には、蘇蒙修正主義者情報システムや叛国集団の拠点、民族統一党武装計画の拠点、内人党、民族統一党、内外モンゴル合併委員会など反動組織の活動地域、外モンゴルへの逃亡事件発生地域、秘密ラジオ局、越境のポイントなど198カ所が示されていた。李良は彼らの努力を高く評価し、「祖国の統一を護るために大きな貢献をしたことを上司にしっかり報告する」と答えた。その一か月後にまた「内外蒙古合併図」と「蘇・蒙修情報系統在北京活動簡図」を李良に提供した。「内外蒙古合併図」の前書きに、「モンゴルの大使館は北京大学、外貿学院の留学生を通して、フフホト市、シリーンゴル盟、フルンボイル盟、ハイラルなどの地域のスパイ組織と聯絡を取り合っている」<sup>45)</sup>と書いてあった。

1968年3月の初めころ、「聯絡センター」は、「關於現行活動的内人党的綜合報告」書を自治区革命委員会核心小組に提出した。報告書の前書きに、「現在も活動が続いている内人党は反革命的スパイ集団であり、建国以来20年間ずっとその活動が続けてきた。彼らは、様々な組織名や活動方式で、自治区内外のあらゆる地域で活動を展開してきた。これらのもとにはウランフー、ハフンガ、テグスを首長とする内人党の叛徒集団であり、総指揮部はモンゴル国の内防部である。モンゴル人民革命党中央と内防部は彼らの特務機関を利用し、内モンゴルで膨大な特務集団を作った。その集団は現在も活動が続けている内人党だ。彼らの反動的な中心思想はパンモンゴル主義で、目的は社会主義を顛覆させ、内外モンゴルを合併することである」<sup>46)</sup>とあった。

1968年4月になると、聯絡センターの数々の業績が積み上げられてきた。特に4月12日から15日の間に滕海清事務室に提出した報告書は上下二冊に分けて合わせて110ページもある長い報告書であった。「内蒙反動党団及敵偽情報系統簡介」であるが、そのなかに計76の反動組織、1351人の名前やこれらの組織の成立や活動時期を1946年3月から1962年までの間となっている。

もう一点、4月13日に極密資料として中央や滕海清事務室に報告された「内蒙古人民革命党現行叛国罪行的報告」なるものは計41頁なり、「内人党」は現在、自治区の公安、検察、司法機関の中まで侵入し、政法機関の権限を奪っている」と断じ

---

45) 啓之2010 P259

46) 啓之2010 P260「関与現行活動的「内人党」的綜合報告」『烏蘭巴干案卷』



た。

1968年6月になると、「抉り出す聯絡センター」は「關於内人党1963年在呼市地区恢復活動的重大案件報告」と「關於内蒙文聯反党叛国集团立案報告書」を1日と13日にそれぞれ自治区革命委員会核心小組に提出した。そして、ウランバガナは革命委員会副主任の李樹徳に一通の手紙を送り、「我々は、新内人党が1963年にフフホト市で活動を再開したあとの状況について詳しい調査をした結果、この案件は成立可能であり、しかもモンゴル人民共和国領事館と直接つながっている。この案件の解決の是非は、206事件の解決に大きな影響をもたらす。我々はこの案件について緊張感を持って調べ続けている。新しい情報が入り次第またすぐに報告する」という認識を示した<sup>47)</sup>。

文化大革命がスタートして間もないころ自治区党委宣伝部長のテグスは、工作組員を連れて内蒙古日報社に乗り込んだ。エルデニオーラは問題になることを警戒し、過去に採用しなかった原稿を焼き捨て処分したことがテグスに発見された。エルデニオーラは反革命分子扱いされたほか、政治文化部の権限はテグスの工作組員に乗っ取られた。「紅八条」<sup>48)</sup>が出された後、エルデニオーラは再び元の権力に戻り、ウランフーは反党叛国的で、内モンゴルの党委員会は彼の路線を実行していると唱えた。そして、1967年11月以後、エルデニオーラは本格的に聯絡センターの仕事に没頭した。

### 聯絡センターとその他の偽造事件

内モンゴル自治区革命委員会成立後、かつて内モンゴル人民革命党の活動に参加した自治区高官らは、次から次へと打倒された。被された罪は、反党叛国集团、反革命分子、反社会主義分子、民族分裂主義者、ソ聯モンゴルの修正主義スパイ、日本のスパイ、国民党スパイなど様々だが、打倒された人たちは、ウランフー・グループ、ハフンガ・グループ、「内人党」グループの外、多数の反動的な組織や案件と結びつけられた。それらの事件は全自治区の都市部から農村牧畜地域のあらゆるところで起きていたとされた。

「内人党」に繋がる案件として、「206事件」、「師範学院叛国事件」、「民族統一革命党案件」など、1950、60年代に歴史的な結論の付いた古い事件や偽造事件が度々持ち出された。これらの事件は「新内人党」の存在を証明する事件として、人々を打倒するたびに繰り返し利用された。これに伴い様々な事件の専門調査組織ができた。

---

47) 「関与内人党1963年在呼市地区恢復活動的重大案件報告」『烏蘭巴干案卷』啓之2010 P261

48) 1967年4月13日 中共中央發布した「関与処理内蒙問題的決定」を略して「紅八条」と言う

## 「206事件」

1963年2月6日に、ウランチャブ盟の郵便局の検閲官が、モンゴル人民共和国首都ウランバートル市の建築処のオイドブドルジという人物宛にモンゴル文字で書かれた一通の封筒を発見した。差出人は内モンゴルウランチャブ盟集寧市民族中学趙金海という人物であった。漢語訳は約7000字程度だった。封筒の中に二通の手紙が入っていて、一通はオイドブドルジ宛に書いたもので、「内外モンゴルの合併を迅速に実現するために、わが党は最近第二次代表大会を開き、内外モンゴルを統一させた社会主義国家の建設を協議しことを、モンゴル人民共和国政府に伝えていただきたい。内モンゴルの人民の運命はすべてこの手紙に託されている。我々はあなたを信じている。また、内外モンゴルの統一を前提とし、我々の党名をモンゴル人民革命党に改め、内モンゴルは外モンゴル側の指導を受ける。現在われわれの活動は秘密状態にある。まだ武装勢力を持っていないため、今までに連絡はできなかった」といった内容が書かれていたという。

もう一通は「モンゴル人民革命党中央、国会議長、内閣」宛に書いたもので、その内容は、「1962年12月26日に制定された中蒙国境に関する条約は内外モンゴル合併を妨害した。我々は、1961年11月26日に22人の代表が参加して開かれた第一回党大会以来黨員数を三倍にまで増やしていたが、条約制定の後我々の黨員数は三分の二まで減った。内外モンゴルの合併はもう水の泡となった。わが党はこの状況の下で、2月3日に43名の代表を集め第二回大会を開いた。党の今後の活動方針として内外モンゴル合併を目指すことで一致した」という内容であり、さらに中国共産党を攻撃した6000字の文章が付け加えられていたという。そして最後に、「モンゴル人民革命党第二次代表大会、モンゴル人民革命党委員会 1963年2月4日」と書いてあった。

内モンゴル公安庁はこの事件を「206事件」と名づけ、内モンゴルですぐに解決できないため、中央の国家公安部に報告した。この事件が発端となって中国共産党中央は内モンゴルの内部情勢に深刻な危機感を抱くようになったほか、文革期になるといつの間にか組織名に「内」が加えられ、「新内蒙古人民革命党（新内人党）」が存在していることになってしまった。当時、作家のジャラガーフたちは、自治区公安庁に通い、内モンゴル人民党に関する極密資料を閲覧するうちに偶然「206事件」の資料を見て写していたようで、ウランバガナはこの事件の存在すら知らなかったという。また当時文芸界の人々に対し、極密の捜査を担当していた文化庁の高官は、「共産黨員でないウランバガナは206事件のことを知る立場にない」と証言している。しかし、「206事件」のように、既に解散させられたはずの内蒙古人民革命党が未だ極秘に祖国分裂活動を進めていたなどという、ウランバガナが知りようもない秘密資料が、文革という特別な時期に「内人党」を摘発する材料となったとはどう

ということなのか<sup>49)</sup>。その背景にあるのは、虚実の分別を識別しない権力の側の焦燥感であろう。

#### 「師範学院叛国事件」

師範学院の叛国事件（「師院叛国案」）とは、1962年内モンゴル師範学院、内モンゴル医学院、内モンゴル大学の何名の学生が、モンゴル人民共和国へ逃亡<sup>50)</sup>したという事件である。1960年初めの三年間の困難な時期にこのような事件は多く発生していたようで、「1962年だけでこのような外モンゴルへの逃亡事件は13件もあって、総人数は358名」いたことを、ウランバガナは「關於内蒙古文聯反党叛国集団立案報告書」で報告している。

#### 「民族統一革命党事件」

この事件は1964年に発生して、当時の文芸整風運動に関係している。当初この党は数人しかいなかった小さなグループだったが、三年後に膨大な反動勢力となった。1968年6月15日に「叛国集団を掴み出す連絡センター」が滕海清事務室に提出した「關於内蒙文聯反党叛国集団立案報告」によると、「民族統一革命党」は、1964年の文芸整風運動の時期に発覚されたが、文化大革命のときにより鮮明に現れた叛国活動を展開する秘密組織である。その党員たちは自治区文芸界のあらゆるところに潜んでいる。文化芸術界聯盟はその古巣である。そのひとりの党員によると、文聯のオソル、ダワ、ジグメドスレン、ナ・サインチョクトらは党員で、1963年の困難な時期に、内外モンゴル合併の旗を挙げ、活動を強化した。ア・オソルは「内人党」幹部バトの命令を受け、集寧市で活動を展開した。ウランバガナがこの組織と「206事件」との関係について調べたところ、この組織は新たな「内人党」であり、中心人物はいずれもソ連とモンゴルのスパイで旧「内人党」の幹部であることから、文革における粛清の主な対象にしなければならないという結論に至った。

1968年2月4日、中共中央の開いた会議において、滕海清と李樹徳の二人は、中央革命委員会に内モンゴルの事情を報告し、中央からの対策指示を求めた。康生は「ウランフーの影響は大きい、とりあえず軍部内の粛清をやるべきだ」としたうえで「内人党」の問題に関しては、「内人党」は現在も地下の秘密活動をしている、その勢力を打倒するために最初は行き過ぎても怖がることはない、大胆にやれ」と指示した。江青も「内モンゴルの階級闘争は複雑であり、革命群衆組織は一部の反動的な党派を抉り出した、群衆専制指揮部の組織はとてもしい形式だ」と助言した。し

---

49) 楊海英2009下P217

50) ウリジバヤル2012

かし群衆専制組織による「内人党」肅清には、信憑性のある資料が必要で、藤海清は作家ウランバガナと「抉り出す連絡センター」を活用した<sup>51)</sup>。

以上、ウランバガナ及び「内蒙古揪叛国集团連絡站」を軸に内モンゴルにおける文化大革命、特に「内人党」事件の経緯について初歩的な検討を試みた。その検討内容を以下の4点にまとめることが可能である。

ウランバガナは、文革の初期に批判の対象とされ、文聯の内部闘争が激しくなるに伴い、事態に不安を感じはじめ、内モンゴルの文革実権派に接近する。被害者から加害者に転じた背景には、文革中の政治闘争のほか、1950年代半ば頃からずっと引きずってきた創作言語の問題や文学作品の「真実性」をめぐる論争の影響も少なからずあった。

「内人党」を抉り出す「連絡センター」を発足する計画案の報告を受けた革命委員会が、「連絡センターを組織することは群衆の自由であり、われわれに干渉する権利がない」と返答した。「干渉しない」というのが一見すれば、人民の自由を尊重しているかのように思われるが、実はこれは「連絡センター」の発足を黙認したことであり、最初から責任を回避するための政治手段だった。なぜならば、「干渉しない」と表明したはずの革命委員会だが、「連絡センター」の発足及び発足後の活動に際して、金銭的に困難があれば革命委員会が全力で協力すると約束したからである。言い換えれば、革命委員会は「連絡センター」発足に「干渉しない」どころか、賛成していた。

「内人党」事件に関聯する資料について、従来は、全てウランバガナが一人ででっち上げたと思われてきたが、実際は同事件の経緯は非常に複雑で、関わった人も大勢で、一人の少数民族の非党員の作家の手でできるものではなかった。「連絡センター」の仕組みから見れば、資料の収集は調査員が行い、ウランバガナたちは調査員の収集した資料を整理し、革命委員会に提出していたことが解明された。これは、内モンゴルの文革に対する簡略化した公式的認識を考え直すきっかけになると考えられる。

「内人党」事件を含み、内モンゴル地域で起きた様々な批判闘争を見る限りで、文革を考える際に漢族地域と少数民族地域の文革を区別して扱う必要があると考えられる。

---

51) 『藤海清の検査』(中共中央档案『林彪江青反革命集团卷』19卷P53～67；『関与林彪江青四人帮製造内人党假案的報告』154全宗17目77卷13号) 啓之2010 P242

### III. 文革後

#### 1. 文革のあと処理とウランバガナの運命

1969年5月、中共中央革命委員会及び軍事委員会は、内モンゴル革命委員会に対し、同自治区における文化大革命に関して重要な指示を下した。指示を受けた自治区の革命委員会は、早速「堅決貫徹執行中央關於内蒙古富前工作指示的幾点意見」という報告を提出し、内モンゴルの政治や社会の安定を維持するため、中央の指示を徹底的に実行することを約束した。報告書はさらに、滕海清は内モンゴルで様々な重要な任務を成し遂げたと評価したほか、内モンゴル革命委員会の実績も事例を挙げて紹介した。その事例として1968年7月5日から21日に開催された第3回全委員会拡大会議を挙げている。会議について「本会議を内モンゴル革命委員会主任滕海清將軍が招集し」、「關於内蒙古人民革命党的處理意見」、「關於内蒙古人民革命团的處理意見」なる二つの文書を審議、決定し、内モンゴル人民革命党を掘り出す決定的な政策を決めた会議となった。しかし、「1968年11月以後、我が核心指導部の中に資産階級の悪者が混ざり、一時期中央の指示からかけ離れ、左傾思想の影響を受けて、階級の敵を過剰に想定し、特に「内人党」を抉り出して肅清する運動の中、拡大化した過ちを犯した。これは「民族団結を破壊し、毛主席の重大なプロレタリア政策や戦略をゆがめた」と「内人党」の肅清は拡大化した過ちを犯したことを認めた。そして、中央の指示通り、「新内人党」を抉り出す運動を取り止め、被害者の名誉回復や善後工作を進める。なかでも重大な「内人党」案に関係のある人物の取り調べを継続し、その他は全部釈放する。今後中央の指示通りに任務を果たすために決心すると5月19日付けで報告している。

この報告を受けて、中共中央は、今までの運動の中で拡大化した過ちを正し、内モンゴルの政局の安定を堅持し、中央の指示通り団結し、更なる革命の勝利を実現させるように努力せよという「5・22批示」<sup>52)</sup>を出した。

#### 毛沢東思想学習班及び文革推進派の自己反省

自治区革命委員会は、「5・22批示」を受けた翌日に「5・23大聯合指揮部」を成立し、自治区内の造反派各グループ間の対立を調整するため、毛沢東思想学習班を立ち上げて、ウランバガナらは自治区革命委員会核心小組と協力して、抉り出し肅清する派、つまり文革推進派のリーダーたちの自己反省を促した。

1969年7月27日に、内モンゴル呼三司紅代会大批判指揮部の雑誌「呼三司」の第

---

<sup>52)</sup> 啓之2010 P402

四号に「烏蘭巴干何許人也」<sup>53)</sup>(ウランバガナとは何者か)という批判文が掲載され、ウランバガナの行状が暴露された

内モンゴルの毛沢東思想学習班終了三カ月後に、中共中央は收拾がつかなくなっていた内モンゴル情勢をコントロールするため、「断固とした措置」を採らざるを得なくなった。1969年12月18日、中央は滕海清ら自治区革命委員会核心小組の構成員を北京に呼び出し、周恩来は毛沢東が批准した「12・19命令」を伝達した。それはすなわち、北京軍区が内モンゴルを幾つかに分割し、全面的に軍事管理するという指示であった。

そして1970年1月から1971年5月まで、自治区革命委員会の決定通り、内モンゴル文聯の多くのメンバーはバヤンノール盟にある北京軍区直属の生産建設兵団の労働者として下放された<sup>54)</sup>。また1970年1月10日から、自治区革命委員会メンバー、自治区各直属機関の幹部、各群衆組織のリーダー7769人を中央主催の唐山毛沢東思想学習班に、3337人を、河北省や山西省の学習班に編入した。その結果、ウランバガナは山西省太原に行かされた。

1970年11月に、自治区革命委员会主任、内モンゴル軍区司令官の滕海清は、文革以来の内モンゴルでの重要なポストから離れた<sup>55)</sup>。

1970年12月下旬の北京軍区党委員会拡大会議で、北京軍区の指導部は交代され、毛沢東に近い人員が選ばれた。内モンゴルにおける軍事管制は終了し、1971年5月13日から18日まで開かれた共産党内モンゴル自治区第三次代表大会で、北京軍区の副司令官の尤太忠が内モンゴル党委員会第一書記に任命され、滕海清のポストは正式に免除された。

### 同時期のウランバガナの動向

こうして内モンゴル人民革命党をめぐる冤罪事件を引き起こした関係者が排除された結果、後ろ盾を失ったウランバガナは危機に直面した。1969年5月13日、内モンゴル大学モンゴル語専攻の学生たちが、ウランバガナを文聯から呼び出して連行し、内モンゴル大学に監禁してしまったのである。ウランバガナはその際「内モンゴル人民革命党を抉り出す資料は私にはない、抉り出し肅清する運動は確かに文聯からはじまった、我々の文聯と内モンゴル日報社の一部の人々はやりだした、私は逆に滕海清にあまり運動を拡大しないよう助言をした」と述べて責任を逃れようとするのがやっとであった。しかし、5月19日に公安局の計画通りに救出され、北京に行き中南海を訪れた。

---

<sup>53)</sup> 楊海英2010「基礎資料2」P816

<sup>54)</sup> S/Oljibatu、Sarancimeg2004 p391

<sup>55)</sup> 楊海英2009「基礎資料1」P62

その後1972年から1975年まで、ウランバガナは、ウランチャブ盟チャハル右翼中旗ウラン公社ナラス大隊に配置され、労働改造に処せられることとなった。

## 2. 冤罪事件としての「内入党事件」評価

### 「新内入党」事件の真犯人をめぐって

こうして党中央が内モンゴルの混乱を實力で鎮めようとする中、具体的にどのような過程を経て、評価を固めていったのか。1974年5月11日に、自治区第一書記の尤太忠は王洪文、華国鋒ら中央の指導者たちと会談した内容を伝達した。

そこで示された党中央の見解は以下の通りである。①内モンゴルで「内入党」を抉り出して肅清したのは滕海清だ。②内モンゴル問題の要は民族問題だ。③これから少数民族幹部養成には注意を払うべきだ。④これからの運動の方針は林彪、孔子を批判することだ。⑤「新内入党」案の解決について、「關於新内入党結案問題的嚴正聲明」を發表した。⑥滕海清たちの誤った指示によって、内モンゴルの共産党組織は「新内入党」として破壊された。⑦反革命分子ウランバガナの「三つの演變論＝三個演變論」は、「内入党」肅清運動の理論的根拠になった。⑧内モンゴル党委員会は必ず「新内入党」事件の真犯人を見つけるべきだ。⑨その奴にはプロレタリアの独裁処罰を科すべきだと決めた。

このような方針をうけて、内モンゴル自治区でも事態の收拾に向けた討論が始められたが、そこで噴出したのがウランバガナに対する憤りであった。1974年6月15日夜、自治区革命委員会礼堂會議室で、自治区革命委員会第一書記尤太忠と常務委員のボロルダイは、師範学院、モンゴル語専門学校、内モンゴル大学の文革派関係者と面会した。その際、ウランバガナが各地で行った講演での煽動内容が問題視され、出席者の一人は「ウランバガナは私と面談して当時の一方的な批判について釈明したいと考えているようで、尤太忠も面談を受け容れるよう望んでいるようだ。しかし私は受け入れない。あのような残酷な行為を繰り返した人物とは話したくない」<sup>56)</sup>と強く批判した。

### 内モンゴルの三大冤罪事件の確定

このような敵意や反感などの後遺症が根強く残る中1978年4月10日、内モンゴル党委員会書記尤太忠は北京を訪れ、党中央に提出した「關於進一步解決好挖「新内入党」的問題的意見的報告」には、「いわゆる新内入党は実在しなかった、完全否定されている、この冤罪事件のものは林彪と四人組にあり、その責任は元自治区党委員会核心小組の重要メンバーにある」と報告した。4月20日に、華国鋒を始めとす

---

<sup>56)</sup> 楊海英2010「基礎資料2」P780～799

る党中央は、この報告に対して「同意、並望認真貫徹執行」という十文字の指示、つまり「420批示」を下した。内モンゴルではこれで四回目の政策実施により、「ウランフー反党叛国集団」、「内蒙古二月逆流」、「新内人党」の三大冤罪事件を徹底的に調べ始めた。1978年の新憲法にもとづいて、内モンゴルで三大冤罪事件に対する専門調査チームを組織し、この冤罪事件の立役者滕海清、「ウランフー反党叛国集団」事件の容疑者、「三個演變論」を捏造したウランバガナなどを刑事処罰することが求められた。

1978年5月17日、「新内人党」を抉り出し肅清する運動で殺害された一部の人のうちの子女たちが、被害状況を記述した資料を華国鋒、葉劍英に報告し共産党中央に訴えはじめた。

1978年12月の中共中央第11期3中全会は、反右派闘争と「四清」社会主義教育運動中に拡大した過ちを正す党中央の政策実施を更に進めることを決め、1980年までは、内モンゴルの被害者に対する「名誉回復」の年に定めた。12月に内モンゴル党委員会から派遣された調査員が、「滕海清在製造新内人党錯案・偽案中的主要罪責」という内モンゴル党委員会の公文書を以て、当時済南軍区副司令官である滕海清に任意調査を行った。滕海清は、調査によって過ちを認めたが、ウランフーに罪を被せたのは、1967年1月27日内モンゴル自治区党委員会の「關於烏蘭夫錯誤問題的報告」と中共中央1967年4月13日の「關於處理内蒙問題的決定」に依拠した。「新内人党」事件は、誰か個人が捏造した事件ではない。この事件は、1966年6月の「前門飯店會議」と1967年4月13日の「紅八条」中央公文書に従った結果である。例えば、1968年4月高錦明は中共中央に「内人党」問題について報告したところ、党中央に大いに評価されていたのである。そのような中、果たして誰に責任を帰することで「内人党」事件の真相を明らかにするのか。そこで当面都合良く利用されたのが「四人組」である。滕海清は、「私は林彪、四人組、康生らの反革命思想の影響や指示を受けて重大な過ちを犯した。当時彼らは党中央を代表していた。私は党中央の指示を執行した。それは私の責任であり、陰謀ではなかった」と振り返った。

### 3. 「ウランバガナ案件」と内モンゴル文革の收拾

#### 文革の責任と内モンゴル革命委員会

1978年以後、内モンゴルでは文化大革命中に冤罪事件を引き起こし、暴力を働いた加害者に対する調査が本格的にはじまった。内モンゴルでの主な責任者滕海清や高錦明に対する任意調査をまとめて、内モンゴル党委員会の108号公文書「關於滕海清在内蒙所犯嚴重罪行和處理意見的報告」と110号公文書「關於高錦明在文革中所犯罪行和處理意見的報告」を1979年11月13日に、中央に報告した。1980年6月、中央規律検査委員会は、内モンゴル党委員会に「把挖‘内人党’全過程的有關文件・



材料等」を全部中央に提供する指示をした。それに従い自治区党委員会は「關於林彪江青四人組製造内人党假案的報告」をまとめて提出した。「内人党」事件を偽造した犯人を処罰しなければ、内モンゴルの各民族人民の怒りを抑えることはできないと報告した。

1980年11月20日に、最高人民法院特別法廷を開き、裁判所に提出した林彪江青四人組の罪をまとめた起訴状計48条のなかに「新内人党」偽造案をひとつの重要事件として盛り込んだ<sup>57)</sup>。

内モンゴル自治区党委員会は、もうすでに内モンゴルを離れた、滕海清、高錦明ら当時内モンゴル自治区党政軍のトップ、革命委員会の重要メンバーに対する任意調査は、彼らに内人党事件の責任を取らせることはできなかった。

### 文革の責任とウランバガナ

1978年5月1日にウランバガナは、共産党内モンゴル自治区党委員会の命令によって「新内人党」事件の偽造者として拘束され、同年9月29日に内モンゴル公安当局に逮捕された。

彼は滕海清の信頼を得た文革推進派のモンゴル人非共産党員作家である。1974年の夏、抉り出し肅清された受難者子女を名乗る若者集団に襲われ、内モンゴルで命の危険を感じたウランバガナは、内モンゴル以外の中国南部の各省へ避難した。家族を養う資金源も絶たされ、給料も支給されなくなった彼は、党中央や、内モンゴル党委員会、軍事管理委員会、フフホト市の領導ら宛てに、十何年間でまた何十万字の自己弁明書を綴った。1982年6月になって「我的検査」を書き始め、「内人党」を抉り出すことは、私ウランバガナが初めて提案したと供述した<sup>58)</sup>。

### ウランバガナ裁判

1984年11月に体調不良のため一時保釈され、自ら5000字の書簡を信訪処（陳情処）に提出したが、それまでの自己弁明の数々の努力は逆効果となり、1987年1月20日にフフホト市中級人民法院（裁判所）に再び起訴されることになった。同年10月31日と11月1日の二日間、フフホト市内の「赤い劇場」にて、ウランバガナに対する公開裁判が行われた。「叛国集団を抉り出し肅清する聯絡センター」が立ち上げた20周年の時に、副センター長のエルデニオーラとともに被告人席に立たされた。裁判は、フフホト中級人民法院が主催し、原告は内モンゴル公安庁の起訴となっている。元々張向東と言う漢人の弁護士が付いていたが、共産党の圧力を受けて姿を

---

<sup>57)</sup> 啓之2010 P495～497

<sup>58)</sup> 啓之2010 P518

くりましたため、弁護士の資格がない息子が「親族弁護人」として法廷に立つしかなかった。

起訴内容は以下の通りである。①1967年9月に聯絡センターを立ち上げて、「内人党」の歴史や1960年代の活動に関する大量の資料を収集した。②更に自治区以外の地域に調査員を派遣し北京、南京などの関係部門や档案館から内人党に関する資料を大量に取り入れて、沢山の偽造資料を作った。③内モンゴルの歴史を歪曲、改竄する罪悪な手段を使い、127件もの資料を偽造した。④「新内人党」反革命集団をでっち上げて、時の内モンゴル革命委員会核心小組に提出したことで、「新内人党」冤罪事件を引き起こした。⑤内モンゴルでの「新内人党」を抉り出す運動に極めて悪影響をもたらした。

「起訴状」では続いてウランバガナ、エルデニオーラ、ラシらが、核心小組に、提出した四篇の文字資料や四つの図表を説明し、さらに1967年10月から1968年5月までの間フフホト地域で行った20回の演説内容を紹介した。ウランバガナは、新内人党を抉り出すために大々的に世論をつくり、民族間の感情を煽り、民族団結を破壊する反動的な言論を沢山つくった等々具体的な内容を盛り込んだ。最後に、被告人ウランバガナ、エルデニオーラは、「新内人党」偽造事件を意図的に作るために、捏造した大量のいわゆる叛国集団に関する資料が、数多くの幹部、群衆を迫害し、計り知れないほどの損失をもたらした。社会的な影響は極めて悪く、「誣告陷害」の罪に当たる。中華人民共和国刑法第138条の規定により、この案件を裁判所に送り、起訴することになった<sup>59)</sup>。

ウランバガナの二人の親族弁護人で、息子のスルリグ（蘇日魯克）と婿の劉雅華は、上述の起訴内容に対し、父親の弁護を行った。そのなかでいくつか起訴内容への反論が注目される。

その一、息子は言う。文化大革命は毛沢東が自ら発動し、その展開を指導した完全に誤った政治運動である。極左思想に支配された中央の指導者たちは最初から歴史を逆転させた。逆らう者は処罰され、従うしかなかった当時の政治と社会的状況を考えると、被告人は中央の指示通りに「前門飯店会議」の決定精神に従い、ウランフーの反党叛国集団を批判し、その組織を抉り出したことは、時の憲法で保護された四つの範囲内にある。そして、裁判官に対して「中華人民共和国刑法第9条の規定では、この法律は1980年1月1日から執行すると決めた。これ以前の行為は、当時の法律の規定に従うべく、今の改定した法律の規定は適用しないため、被告人の無罪を主張する」と訴えた。

その二、1978年4月20日に「この冤罪事件のものは林彪と四人組にあり、その責

---

<sup>59)</sup> 啓之2010 P519「起訴書」『烏蘭巴干案卷』

任は元自治区党委員会核心小組の重要メンバーにある」と中共中央は指示を下した。それは今まで「新内人党」事件の責任問題に関するもっとも法的な根拠を示した中央の文書である。したがって、この事件の責任を滕海清、呉濤、高錦明、権星垣たちが負うべきだ。ウランバガナは一般群衆の一員で、全自治区を巻き込んだ膨大な規模の冤罪事件を引き起こす能力や力はない。彼はこの案件の一般の参加者である。偽造者ではない。そして裁判官に向かって「冤罪事件を引き起こした人は法の制裁を受けなくて、只一人の参加者が事件から20年後に裁判に立たされたのはなぜなのか。憲法第33条は、中華人民共和国の公民は法律の前一律平等であると決めた。そうであるなら、彼らもこの法廷に立つべきだ。彼らは内人党事件の問題でどんな処罰を受けたのか。法治を強調する今日では、法律の前に人々の不平等は在り得るのか。このような重大冤罪事件で、一人の少数民族作家、一般人が政治の犠牲者にされることは、これはまさに贖罪の山羊ではないか。これらの一連の疑問を解決しない限り、ウランバガナの案件はあくまでも一つのでたための案件になりかねない」<sup>60)</sup>と弁明した。

この二つの弁明質問に対して、法廷審理は一時騒然となった。当時の裁判官はこの問題に対して満足の答えを出せなかったものの、ウランバガナ判決の結果に影響はしなかった。1987年11月4日、フフホト市中級人民法院は、この案件について審理委員会が協議し、11月9日に終審判決を下した。刑法138条、92条の規定通り、「誣告陷害罪」に当たる為、被告人ウランバガナに懲役15年間の判決を言い渡した。刑期は1978年5月1日から1993年4月30日までと規定した（1978年の拘束から裁判までの9年間と最後に釈放までの6年間を合わせて15年間）。政治的権利を5年間剥奪する、との内容だった。

こうしてウランバガナは、文革期に一人のモンゴル人作家が作り上げたとされる叛国的な内人党の「黨員リスト」の作成によって、多くの内モンゴル人が「内人党」として肅清された<sup>61)</sup>事件の首謀者・捏造者であるとの決定がなされた。この裁判は、被告人は、「中華人民共和国刑法」第138条の規定や「中華人民共和国刑事訴訟法」第100条の規定によって起訴、処罰された。この真犯人を逃すための「正義の裁判」(楊2009 p197)を政府側は、被害者（内モンゴル文化大革命肅清キャンペーン中、計346000人が逮捕され、27900人が殺害され、12万人に障害が残った）の名誉回復と並び、内モンゴル文化大革命肅清キャンペーンを収束させるものであると位置づけられている。この案件の判決は、既に改革開放期に突入した現代中国の体制を揺るがすことなく、社会全体において内モンゴル文革に対する人々の共通の認

---

<sup>60)</sup> 啓之2010 P520 「弁護詞」『烏蘭巴干案卷』

<sup>61)</sup> 邢野2005 p220

識として定着した。

「裁判」に先立ち1987年5月に、内モンゴル政法委員会がウランバガナ案件について特別会議を招集し、内モンゴルの公安、検察院、司法機関のほとんどの責任者が参加した。参加者の意見が二つに分かれ、多くは裁判にかけて重い処罰を加えることで共通の認識を持っていた。しかしそのなかで、内モンゴル司法庁孟和鉄木爾庁長をはじめ、呼和浩特市検察院張風毅副檢察長、安全庁劉志中庁長、検察院鄭力群副檢察長らはそろって、被告人ウランバガナひとりに対して文革の罪を問うことや「内人党事件」の責任を追及することに異議を唱え、目前の取り調べや調査資料だけでは断罪することは出来ないとした。その主な根拠は以下の通りである。①ウランバガナは重要な指導者ではないから重い刑事処罰は適切ではない。②重要な立場にいた人々には、中央側にいつまでも庇われる人がいる。ここでいう重要な指導者というのは、参加者皆が知っている滕海清である。厄介なことに、この時期に内モンゴル档案馆、内モンゴル公安庁の資料室などで、「内人党」を抉り出す事件に関する資料は既に見つからなくなっていた。また席上では、ウランバガナの資料はいくらでもあって、滕海清に関する資料は一切ないというのは参加者たちを驚かせた。というのも滕海清の資料は1981年6月の時点で全部中共中央規律検査委員会が回収していたためである。また、かりに滕海清の資料は見つかったとしても、ウランバガナに対する裁判の結果を今さら変えることはできず、「内人党事件」に続き、「ウランバガナ案件」も中国共産党の内モンゴルに対する管理を更に強化した象徴的な出来事となった。

実は、最初から「内人党」冤罪事件に関わった人たちの中で、ウランバガナ以外の人々が拘束されていないことについて、内モンゴル検察院副院長は中央組織部に確認し、「内人党事件の責任者はほかにもいるのに、ウランバガナだけを処罰してはいけない。しかし、中央には中央の考えがあり、指導者が過ちを犯しても行政処分を科す、だから刑事処分は下の連中だけに適応されたのではないか<sup>62)</sup>」と考えた。内モンゴル安全庁の庁長も、当時革命委員会核心小組のメンバーについて、この案件の解決方法について、中央に七回も報告して、解決策を求めていた。しかし中央の返答は、「中央の幹部については中央で処理する。この問題は複雑であるため、具体的な回答を控える」というものであった。そして党紀律検査委員会も「ウランバガナ裁判は、中央の指示に従って行う」という最終判断を下した。それは内モンゴルにおける文化大革命の終止符を打ったという唯一の法的な根拠となった。

そして2005年6月23日に突発性心臓病のためフフホトで死去する（享年77歳）まで、ウランバガナは公の場でこの裁判結果について発言しなかった。

---

<sup>62)</sup> 啓之2010 P522 「内蒙古政法委會議記録」『烏蘭巴干案卷』

文化大革命の一時に内モンゴルの風雲児となった作家ウランバガナだが、文化大革命終了後の境遇は、誰からも嫌悪される不運なものであった。内モンゴルにおける文化大革命は、全国における展開とは大きく異なり、1966～69年の間に集中していた。この期間中内モンゴルで三大冤罪事件が起こり、1969年頃になると「内人党事件」を象徴される、モンゴル人に対する肅清キャンペーンは頂点に達していた。この状況に気付いた中央の文革指導部は、「5・22批示」を下し、それを少し抑えようとした。そして内モンゴルの文革推進派の人たちに対する毛沢東思想の学習を指導し、武力闘争からイデオロギー的にリセット効果を図った再教育運動を実施した。この中で文革推進派の自己反省が行われ、大肅清運動中の責任問題も浮上してきた。被害者たちの陳情も日々増えて、革命委員会や滕海清やウランバガナを訴え、責任を追求し始めた。中央には明らかに革命委員会に責任があるという一方で、ウランバガナに責任を押し付けようとする傾向もみられた。

最終的に往時の革命委員会のメンバーたちが内モンゴルを次々と離れた。ウランバガナだけが生まれ育った内モンゴルを出ることなく、内人党冤罪事件の責任を問われ、内モンゴルでの文革のあと処理を象徴した「唯一の正義の裁判」で有罪判決を受けた。

## 終わりに

近現代内モンゴルにおける社会変遷を振り返るなか、領土喪失と行政変更が内モンゴルの民族主義者の民族運動を刺激し、民族運動の挫折及び中華人民共和国の多民族統治の本質は、現代内モンゴル文学と政治との関係においても明らかに見えてきた。現代内モンゴルは政治と一体化され、作家の育成や作品の創作など、すべて党の重要政策に従って生産されたことを指摘したい。具体的には、内モンゴル文芸工作者聯盟と中国作家協会内蒙古分会は、その政治舞台となった。内モンゴルにおける中国共産党の統合のプロセスのなかで、エリート層の再教育問題はもっとも重要な課題であった。特に革命的作家の育成問題は、エリート層再教育の代表的な事例である。ウランバガナというごく普通の少年が、現代中国文学史上一世を風靡した有名な作家に「育てられた」経緯は内モンゴルを取り巻く政治背景と関係している。ウランバガナが如何に革命的作家として育てられる適切な育成対象として選ばれたのか。「満洲国時代の黒い過去」と予備党員の資格を剥奪されたことで、大きなコンプレックスを抱えたウランバガナは文学創作を党に対する忠誠心を示す手段として選び、最終的に革命的作家の道を歩む。ウランバガナの革命的作家として育てられた経緯から、民族エリートの思想改造や権力者側から与えられた名誉は、いつまでも評価されるものではないはずである。名作『草原烽火』が生まれた経緯から、

作家と同様に作品も党の政策のもとで、政治需要によって排出され、党の政策を社会全体に広めてゆくプロパガンダの役割を果たしてゆく。

文化大革命期のウランバガナの行動は、内モンゴルにおける文化革命の一側面を表し、文革の初期に批判対象となったウランバガナが、文革の実権派の側近となる経緯を考察することで、被害者から加害者に転じ、文革期のモンゴル人エリートの内部対立の複雑な姿が浮き彫りになった。

内モンゴルにおける文化大革命は、全国における推進状況と少し違っていて、1966年から1976年までの10年間だけでなく、今日までその後遺症が残っている。1969年頃になると「内人党事件」を象徴される、モンゴル人に対する肅清キャンペーンは頂点に達していた。ウランバガナはある程度、現代内モンゴル知識人を代表することが可能であるが、彼の経歴や社会関係からして、彼を内モンゴル知識人の代表と全面的にみなすことは不可能であろう。現代内モンゴルエリート層の政治動向を全面的に、総括的な研究するにはより広い範囲で考えるべきである。今後の研究では、より多くの知識人を視野に入れることも重要である。そして、現代内モンゴルを取り巻く様々な政治勢力の動向や、その内モンゴル政策を考慮した上で、知識人の動向を検討し、詳細な活動を検討したい。今回は、建国初期から文化大革命期を通して、ウランバガナの活動を一事例として検討したが、考察がウランバガナ一人に集中したことは当面の限界として否めないため、今後の研究ではより多面的な知識人の思想と行動を取り上げ、内モンゴルにおける民族問題の展開を立体的に捉えたい。最後に、今日の内モンゴルは、民族教育の問題や伝統文化の衰退、知識人の自由思想の喪失など多くの課題に直面している。こうした意味で、建国初期の内モンゴルエリートの動向や共産党の民族統合政策の実態を再認識する必要が不可欠の要素であろう。

## 参考文献、資料

- 楊海英 2009、2011 『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』（上下続）岩波書店
- 2014 『ジェノサイドと文化大革命—内モンゴルの民族問題』 勉誠出版
- 2016 『モンゴル人の民族自決と「対日協力」いまなお続く中国文化大革命』 集広社
- 2013 『中国とモンゴルのはざままで—ウランフーの実らなかつた民族自決の夢』 岩波書店
- 呼斯勒 2004 「凶們・祝東方著『康生於「内人党」冤案』」 『中国21』 Vol.19
- 小山三郎 1993 『現代中国の政治と文学—批判と肅清の文学史』 東方書店

小山三郎1988『現代中国における政治と文学』アジア経済学会  
加々美光行1986『現代中国のゆくえー文化大革命の省察Ⅱ』アジア経済研究所  
牧田英二1985「中国少数民族作家」『中国語講座』  
阿木兰2011『孔飞风雨坎坷六十年新中国开国蒙古族将军孔飞传记』(下) 内蒙古人民出版社  
色・乌力吉巴图、萨仁其木格2004『纳・赛音朝克图年谱』内蒙古人民出版社  
阿・敖德斯尔1983『生活於创作实践』(モンゴル文字) 内蒙古人民出版社  
図門、祝東力1995『康生と「内人党」冤案』中央民族出版社 北京  
『「草原烽火」評論集』内蒙古人民出版社1959年  
『内蒙古文化大革命通志』中国科学教育文化国際交流促進会出版社2005年 香港  
『内蒙古自治区文学』内蒙古人民出版社1960年  
梁庭望、李云忠、赵志忠2006『20世纪中国少数民族文学编年史』辽宁民族出版社  
高樹華2007『内蒙文革風雷』—一位造反派領袖的口述史 明鏡出版社 香港  
『内蒙古自治区文学史』内蒙古人民出版社1960年 内蒙古大学中国語言文学系編  
烏蘭巴干1995『草原烽火』貴州人民出版社  
阿拉騰德力海1999『内蒙古挖肅災難実録』楊海英和訳  
郝维民1991『内蒙古自治区史』内蒙古大学出版社  
——2000『百年風雲内蒙古』内蒙古教育出版社  
啓之2010『内蒙文革実録「民族分裂」於「掘肅」運動』天行建出版社 香港  
宋永毅2006『毛沢東の文革大虐殺』村田州二訳 原書房  
邢野、宿梓枢2005『内蒙古文化大革命通志』中国科学教育文化国際交流促進会出版社香港  
周作秋1984『玛拉沁夫研究专集』内蒙古人民出版社  
烏蘭巴干1959「我是怎樣開始写作的」『萌芽』第19期  
葉聖陶1959「読『草原烽火』」『人民文学』  
姚文元1959「評『草原烽火』」『文藝報』